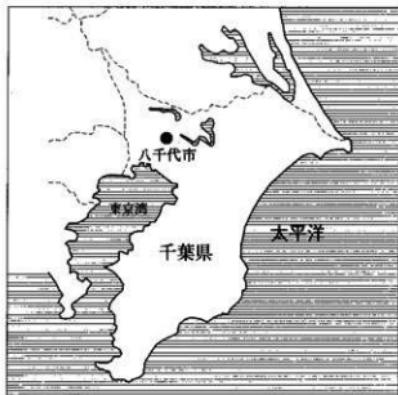


千葉県八千代市

しも こう や しん やま  
下 高野 新 山 遺 跡

- 埋蔵文化財発掘調査報告書 -



平成 21 年度

医療法人 心和会

八千代市遺跡調査会

## 例　言

- 1 本書は、医療法人 心和会による病院建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県八千代市下高野字新山552ほかに所在する下高野新山遺跡（遺跡番号八千代市92）における第1次確認調査及び第1次本調査と下高野新山古墳（八千代市273）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は医療法人心和会の委託を受け、八千代市遺跡調査会が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、下記の期間及び担当者により実施した。

確認調査	昭和61年8月8日	～	昭和61年9月12日	担当	白石信也
本調査	昭和61年10月14日	～	昭和61年11月17日	担当	白石信也
追加確認調査	昭和61年11月15日	～	昭和61年11月17日	担当	白石信也
整理作業	平成20年1月15日	～	平成20年12月25日	担当	秋山利光
- 5 整理作業は、実測・トレース等を秋山利光・植田正子・立松紀代美が行い、遺物の写真撮影・本書の執筆・編集を秋山が行った。  
地形図及び遺構の挿図は、コンピューターにより作図したものを用い、また、遺物の写真についてはデジタルカメラで撮影したものを図版として使用している。
- 6 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。  
第1図 国土地理院発行 1/50,000「佐倉」（平成10年発行）  
第2図 大日本帝国陸地測量部発行 1/20,000「神崎」（明治37年測図・明治40年発行）  
第3図 八千代市発行 1/2,500「八千代都市計画基本図」No19・No24（平成13年修正）  
をそれぞれ、加筆・修正している。
- 7 本書の遺構実測図における用例は、以下のとおりである。
  - (1)実測のための方眼測量は日本測地系に基づく平面直角座標（第IX系）を基準に実施している。それにより、本書で用いる図中の北方位は同座標における北を表す。また、現行の世界測地系に基づく平面直角座標への変換は行っていない。
  - (2)遺構図面の縮尺は炉穴及び土坑を1/60、地下式坑を1/80、古墳測量図及び検出遺構は1/200とした。
  - (3)遺構図中の破線は推定復元線を示す。記号等は図中に凡例を示した。
- 8 本書の遺物実測図における用例は、以下のとおりである。
  - (1)図面の縮尺は基本的には以下のとおりとした。  
完形土器実測図 1/4 土器拓影図・土製品実測図 1/3 石器・石製品実測図 2/3～1/3
  - (2)図中の網掛けは以下のとおりとした。  
 塗土に繊維混入       須恵器断面       細
  - (3)図中の挿図番号の後に遺物の出土トレンチや取り上げナンバー等を記載し、また、石器及び土製品について重量も併記した。
- 9 (1)確認調査と本調査でのグリッド名称は両者ともアルファベットとアラビア数字をもって表示しているが、本書において両者の混同を避けるため「確」と「本」をグリッド名の先頭に付した。  
(2)表又は本文中の〔 〕は現存値、〔 〕は復元推定値を表している。  
(3)その他、本資料に関する注意事項について、第1章第5節に付記した。
- 10 本遺跡の発掘調査に伴う出土品及び図面、写真等の記録類は八千代市教育委員会で保管している。

## 目 次

### 例 言 目 次

第Ⅰ章 遺跡と調査の概要.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 遺跡の立地と調査の概要.....	1
第3節 周辺の遺跡.....	3
第4節 確認調査の概要.....	4
第5節 本調査の概要.....	6
第Ⅱ章 縄文時代の概要.....	9
第1節 遺構.....	9
1 炉穴.....	10
2 土坑.....	18
第2節 遺物包含層と出土遺物.....	19
1 早期前葉（撚糸文系土器群）.....	19
2 早期中葉.....	20
3 早期後葉（条痕文系土器群）.....	21
4 土製品.....	29
5 中期.....	29
6 石器.....	30
第Ⅲ章 その他の時代の概要.....	32
第1節 古墳.....	32
第2節 土坑.....	33
第3節 その他の検出遺構.....	35
第4節 縄文土器以外の出土遺物.....	36
第Ⅳ章 まとめ.....	37
報告書抄録	卷末

## 図 版 目 次

図版 1 確認調査状況・表土掘削状況・遺構検出状況・包含層調査状況・本調査区発掘状況等	
図版 2 06・07・08・11・12・13・19・23・24・14号遺構	
図版 3 16・18・19・04・20号遺構・01・02・22号遺構	
図版 4 03号遺構・下高野新山古墳・本N2グリッド遺物出土状況・方形周溝状遺構・竪穴住居跡	
図版 5 06・07・08・09・11・12・13・19・23・24・14・15・17・21号遺構出土遺物	
図版 6 縄文土器1（早期前葉）・縄文土器2（早期中葉）・縄文土器3、4（早期後葉1、2）	
図版 7 縄文土器5、6（早期後葉3、4）・縄文土器7（早期底部）	
図版 8 縄文土器8（円形土製品）・縄文土器9（中期）・石器・その他の遺物	



第1図 下高野新山遺跡と周辺の縄文時代早期の主な遺跡

0 1km 2km  
1/50,000

△貝層を伴う遺跡 ○炉穴や住居跡を伴う遺跡 ●遺物散布地

- 1.郷遺跡 2.保品塚遺跡 3.上谷遺跡 4.栗谷遺跡 5.堀塚遺跡 6.内焰遺跡 7.道地遺跡 8.間見穴遺跡 9.真木野向山遺跡
- 10.瓜ヶ作遺跡 11.本郷遺跡 12.桑橋新田遺跡 13.美丸遺跡 14.ワサル山南遺跡 15.芝山遺跡 16.内野南遺跡 17.ワイノ作遺跡
- 18.ワイノ作東遺跡 19.内込遺跡 20.川崎山遺跡 21.浅間内遺跡 22.仲里遺跡 23.新林遺跡 24.上座貝塚 25.作畠遺跡
- 26.先崎西原遺跡 27.トケ前遺跡 28.松崎IV・V遺跡 29.松崎II遺跡 30.船尾白幡遺跡 31.逆水遺跡 32.高津新田遺跡

# 第Ⅰ章 遺跡と調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

昭和61年4月11日、医療法人 心和会から八千代市下高野字新山552他の面積11,062.97m<sup>2</sup>の区域に病院建設を目的として「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。

照会を受けた八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）が現地踏査を行ったところ、照会地は周知の遺跡の範囲内ではあったが、現況が山林であり遺物の散布を確認することができなかった。

そのため、同年5月8日及び6月5日に試掘調査を実施した。調査はトレントを9ヶ所、約94m<sup>2</sup>を掘削し実施した。その結果、縄文時代早期の土器等が出土し、遺構も確認された。また、塚状の土盛りの周囲で周溝らしき落ち込みも確認した。市教委は千葉県教育委員会（以下「県教委」という。）にこれらの状況と意見を付して報告した。同年6月17日、県教委から照会地の全域について、縄文土器及び土師器の包蔵地と古墳1基の埋蔵文化財が所在するとの回答があり、その旨、照会者に伝達した。

昭和61年6月2日、当初の照会区域に一部追加があり、変更された11,590m<sup>2</sup>の区域に対して、文化財保護法（以下「法」という。）第57条の2第1項の規定による土木工事の発掘届が医療法人 心和会から提出された。事業者との協議で、遺跡の状況を把握するための確認調査を実施することとなり、事業者から委託を受けた八千代市遺跡調査会が照会区域に対して、法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘届を同年7月4日市教委に提出し、準備の整った同年8月8日に確認調査を開始し、9月12日に終了した。

確認調査の結果、縄文時代の土坑3基、方形周溝状遺構1基、古墳1基、古墳時代竪穴住居跡2軒、中世以降の土坑1基、時期不明の土坑1基、縄文時代早期（条痕文系土器）の土器多数と土師器若干を確認した。これらの確認調査の結果に基づき、古墳1基を含む約4,000m<sup>2</sup>に対して保存すべき埋蔵文化財が所在するとする県教委からの通知を事業者に伝達した。

事業者と協議を重ねた結果、病棟建設区域について記録保存のための調査を実施し、それ以外については現状保存することとなった。また、新たに開発に追加された区域についても、本調査時に、あわせて確認調査することとなった。遺跡調査会は記録保存する区域約1,300m<sup>2</sup>に対して、昭和61年9月12日法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘届を提出し、準備が整った同年10月14日に本調査を開始した。

追加された区域604.82m<sup>2</sup>は、本調査期間中の11月15日から確認調査を実施した。

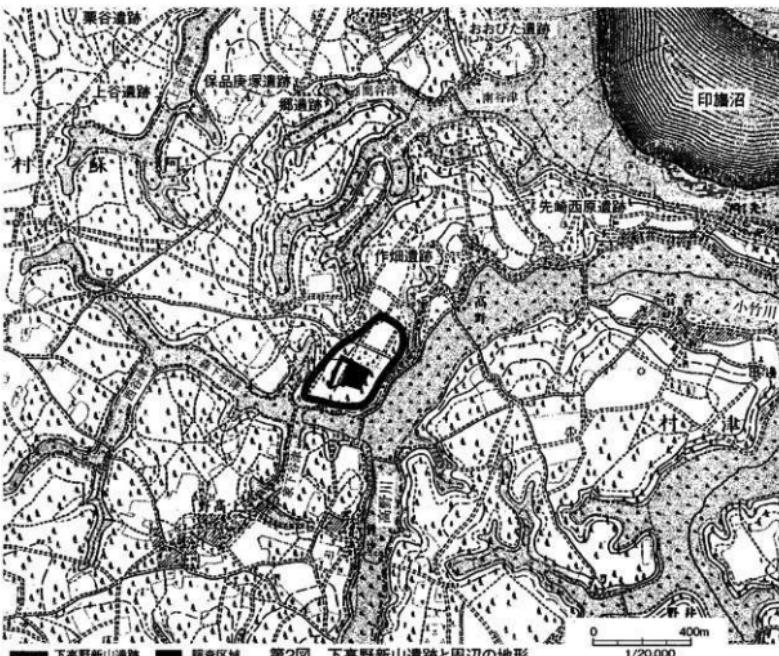
## 第2節 遺跡の立地と調査の概要

八千代市は千葉市の中心部まで約13km、都心までは約30kmの距離にある。

下高野新山遺跡は八千代市の東部に位置し、佐倉市との市境を流れる高野川の左岸、下高野の台地上に所在する。

高野川は佐倉市井野周辺に源を持ち、印旛沼水系に属する。水源には成田街道（国道296号線）の近くに所在する加賀清水もそのひとつとなっている。川の流れは南から北に流下し、周囲の流れを集め、下高野付近で流れを東に向ける。また、この付近で名前を小竹川に変えて、印旛沼に流れ込んでいる。

下高野では西方から西谷津・森下谷津が高野川と合流する。この合流地点付近を形成する地形面は谷津の右岸を下継上位面、左岸を下継下位面と区分されており（参考文献13）、下高野新山遺跡は左岸の下継下



位面の標高24m前後の台地上平坦面に立地している。(第2図)

本遺跡の調査は本報告書掲載区域が最初の調査区域であり、その後、同一の開発事業により周囲に拡張され、平成20年時点で5回の確認調査と4回の本調査が実施されている。

第2次の確認調査は、1次調査区の東側隣接区域の1,408m<sup>2</sup>で、昭和63年12月12日から同月15日まで行われた。土坑5基、竪穴住居跡1軒が確認され、主に縄文時代早期の条痕文系の土器が出土した。

3次確認調査は1次調査区と2次調査区の北側に隣接する区域で2,895m<sup>2</sup>が対象となった。調査は平成元年9月1日から13日まで行われた。土坑が2基、縄文時代早期の条痕文系の土器が出土している。

2次本調査は1次の調査区と2次の確認調査区にまたがる区域、約1,200m<sup>2</sup>が対象となり、平成6年9月27日から11月25日まで行われた。遺構は炉穴29基、土坑27基、縄文時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代後期の竪穴住居跡1軒が検出されている。遺物は旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早期の条痕文系の土器が多く出土し、石器や磨石も出土した。また、古墳時代の土師器や土玉も出土している。

4次確認調査は1次本調査区の南側に隣接する1,530m<sup>2</sup>の区域に対して、平成13年3月19日から同月26日までの期間実施された。縄文時代早期の土坑22基が検出され、縄文時代早期の条痕文系の土器や同中期の阿玉台式土器などが出土している。調査の結果、区域内696m<sup>2</sup>に遺跡が所在すると判断された。

3次本調査は4次確認調査の結果による696m<sup>2</sup>が対象となり、平成13年5月14日から6月25日まで行われた。縄文時代の竪穴状遺構1基、土坑21基、歴史時代の土坑1基が検出され、縄文時代早期の条痕文系の土器や

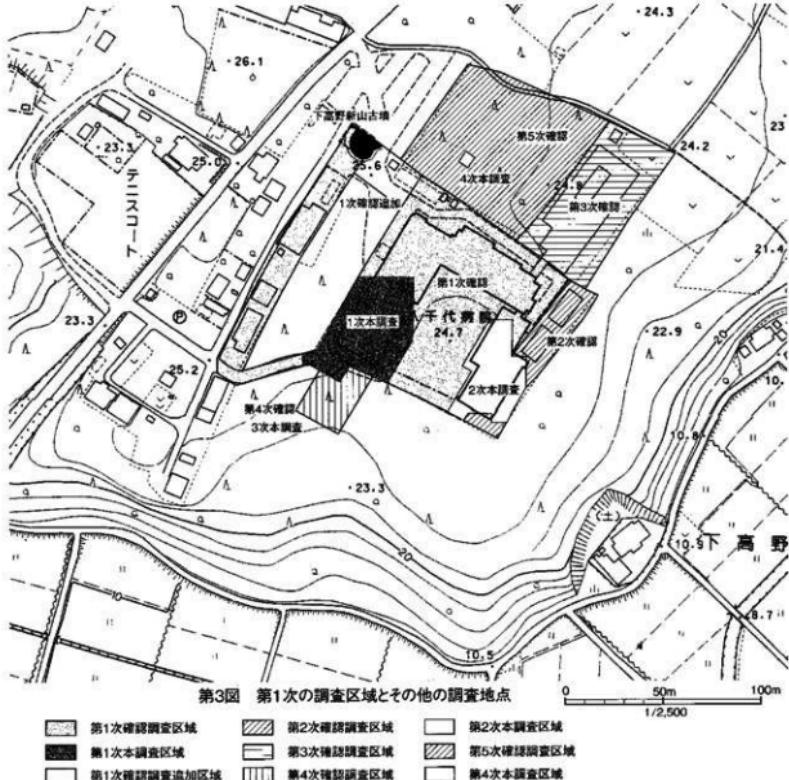
土器などが出土している。

5次確認調査は1次確認調査区の北側に隣接する4.985m<sup>2</sup>の区域に対して、平成18年7月27日から8月21日まで実施された。竪穴状遺構1基や土坑3基などが検出され、縄文時代早期の条痕文系の土器が少量出土した。この確認調査の結果により、30m<sup>2</sup>の区域に対して4次本調査が同年9月1日から12日まで行われ、縄文時代中期の竪穴状遺構1基が調査されている。

### 第3節 周辺の遺跡

本遺跡で検出された遺構・遺物が縄文時代早期を主体としているので、本節では当該期を中心とした周辺の遺跡について概観する。

本遺跡の北西約1.5kmの印旛沼南岸には上谷遺跡(3)、栗谷遺跡(4)、境堀遺跡(5)、向境遺跡(6)などが集中して所在している。上谷遺跡は稻荷台式を中心に、井草I式から花輪台式までの遺物が出土している。沈線文土器もわずかにみられるが、条痕文土器が多量に出土している。野島式を主体として茅山下層式までの



土器がみられる。条痕文期の遺構として、竪穴住居跡2軒、土坑約130基、炉穴が360基以上検出されている。また、条痕文土器が混入する貝ブロックも検出されている。栗谷遺跡は、上谷遺跡と同一の台地の北西側に立地している。井草・夏島式の土器も出土しているが、野島式を中心とする条痕文土器の出土が多い。また、40基ほどの炉穴が検出されている。谷津を隔てて北側に所在する境堀遺跡では撫糸文期の稻荷台式から花輪台式の土器が出土している。また、条痕文期では子母口式から茅山下層式まで出土し、繩ヶ島台式を中心としている。炉穴は5基が検出されている。向堀遺跡は同一の台地の南側に立地し、撫糸文期の花輪台式を主体として、稻荷台式から平沢式まで出土している。条痕文期は繩ヶ島台式が主体のようであるが、11基の炉穴も検出されている。これらの早期の遺構遺物は台地先端の小範囲にまとまって検出されている。

本遺跡から北西方向に約3.8kmの対岸に間見穴遺跡<sup>(8)</sup>が所在する。間見穴遺跡では繩ヶ島台式から茅山下層式の土器を中心に出土している。同時期の竪穴住居跡4軒、竪穴状遺構2基、炉穴14群27基など多数検出されている。また、貝ブロックも遺構の内外から20ヶ所が検出されている。

周辺には、道地遺跡<sup>(7)</sup>、真木野向山遺跡<sup>(9)</sup>、瓜ヶ作遺跡<sup>(10)</sup>でも条痕文期の炉穴が検出されている。

本遺跡で検出された縄文時代早期中葉の東北地方で出土する明神裏Ⅲ式に類似した土器は、市内では近年ヲサル山南遺跡<sup>(11)</sup>（参考文献11）でも検出されている。同様の類例は東峰御幸畑東遺跡でも明神裏Ⅲ式並行土器として報告がある。

#### 第4節 確認調査の概要

調査の経過 昭和61年8月8日からトレンチの掘削を開始し、同年9月12日に調査を終了した。

##### 調査の方法

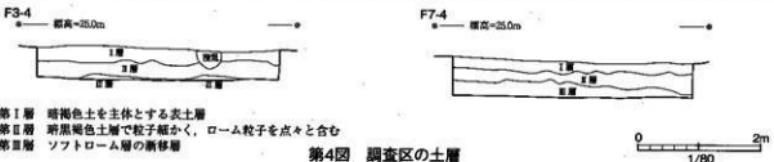
遺構や遺物の調査区域内での位置を確定するため、調査区全体に対し平面直角座標区系による公共座標を基準に20m方眼のグリッドを組み、この方眼を基準に測定した。杭の名称は東西方向にアルファベットを用い、南北方向にはアラビア数字により表示し、グリッド名称は北西隅の杭名称をもって表示した。

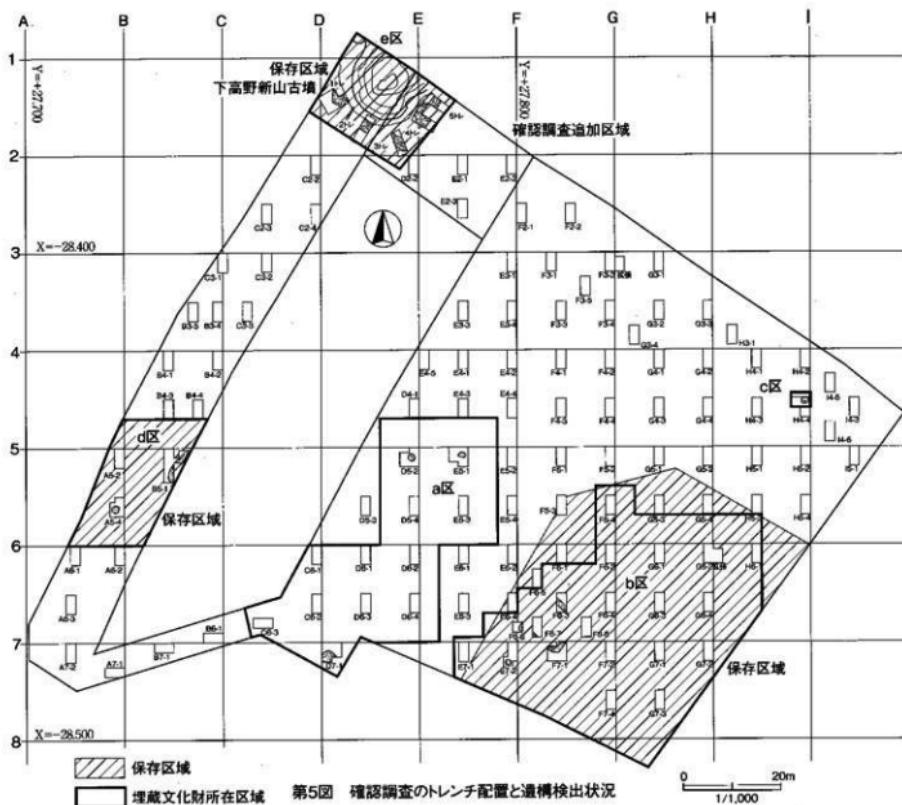
確認トレンチは各グリッド内に2m×4mのトレンチを4ヶ所設定することを当初の基本とし、必要に応じて拡張又は追加した。トレンチ名称はグリッド名称に随時枝番を付して表した。

現況で当初より確認されていた古墳は周溝の検出を目的に放射状に任意の位置に任意の規模でトレンチを設定し、掘削した。トレンチの名称は掘削順に古墳1トレンチ、2トレンチ・・と付した。

調査面積は全体の状況を把握するため、調査区全体の面積の10%を目標に行った。最終的に確認調査のトレンチは拡張したものも含めて、121ヶ所となった。掘削面積は1,024m<sup>2</sup>となり、調査対象面積に対して8.8%の調査を実施したこととなる。

標高については、公共座標によるグリッド設定時に、数ヶ所設定されているが、記録がなく不明である。





第5図 確認調査のトレーン配置と遺構検出状況

#### 遺構確認面と土層

遺構の確認面はソフトローム面まで下げれば確実に認識できたが、掘削により遺構そのものが消滅する可能性があり、II層中からもかろうじて検出することができたものについては、検出された層位を遺構の確認面とした。土層の観察と記録は南北・東西方向とした。南北方向はEとGの杭ライン、東西方向は5と6の杭ラインの土層を観察し、実測し記録した。

#### 確認調査の成果

確認調査により、縄文時代の土坑3基、古墳時代と推定された竪穴住居跡が2軒、古墳1基、時期不明の土坑2基、方形周溝状遺構1基を検出した。

出土遺物は縄文時代早期後葉の条痕文系の土器が大半を占めていた。この時期の土器の散布は調査区全体から出土する状況は確認されていたが、出土量に濃淡がみられた。また、その他に土師器片も少量出土していることが確認された。

## 第5節 本調査の概要

### 調査区域

確認調査の結果から、遺構が検出されたc区、e区の2ヶ所と、縄文時代早期後葉の条痕文系の土器が比較的濃密に出土するa区、b区、d区(第5図)の3ヶ所の遺物包含層区域の合計5ヶ所に埋蔵文化財が所在すると判断された。このことを基として事業者と協議の結果、病院建設工事の進捗とを考慮して、病棟建設範囲に記録保存区域を限定し、その他の区域については駐車場や運動場として現状保存することになった。その結果a区とb区の一部及びc区の面積1,300m<sup>2</sup>が本調査による記録保存の対象とされた。

### 調査の方法

本調査区域はa区とb区の一部からなる縄文時代早期の包含層の調査を中心とする区域と遺構が単体で検出されているc区の2ヶ所からなっていた。そのため、a区とb区の一部については遺物の出土状況を詳細に把握するため、グリッドを4m単位で区切ることとし、基準は確認調査と同様に平面直角座標系による公共座標とした。本調査区域内の杭名称は東西方向にアルファベットを用い、南北方向にはアラビア数字により表示し、グリッド名称は北西隅の杭名称をもって表示した。確認調査と本調査で同様のアルファベットとアラビア数字を用いたため、グリッド名称だけでは確認調査か本調査か区別ができない場合があるため、例言で本書の表記方法について定めたように、本文中のグリッド名称の前に「確」・「本」を挿入している。また、c区については遺構単体であるため特に本調査のためのグリッド名称は付けず、確認調査のグリッドを用いて調査を実施している。

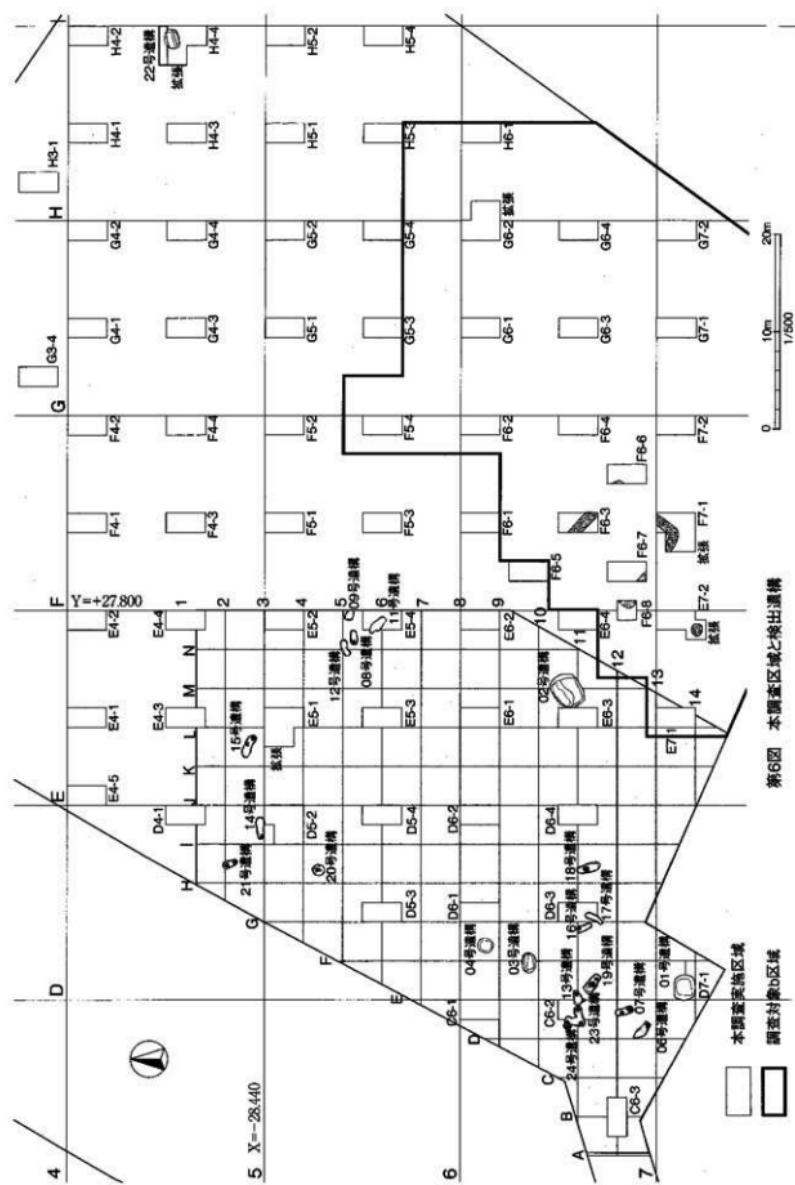
遺物の包含層調査区は遺構の確認面がⅡ層中にあり、またⅡ層自体が遺物包含層として調査対象になっているため、重機による表土剥ぎをⅢ層上面で止めている。しかし、遺構単体の調査区であるc区についてはⅢ層上面まで表土剥ぎを行っている。

#### \* 本書及び本遺跡資料の取扱いについての参考事項

- 1 標高は、BM(ベンチマーク)の標高の記録がなかったため、BMからの+/-のみ表記せざるを得なかった。さらに、BMが複数存在しており、実測に使用したBMも不明なため相対的な高低差も表すことができなかつた。しかし、図面上に標高の記載がある場合にはそのとおり記載した。
- 2 1Pの出土遺物は、現地調査で1P内出土として取り上げているが、図上において1P内から出土していたことが確認されたため、本報告書では確認したとおりに変更して扱った。しかし、遺物の注記は「1P」のままである。
- 3 追加確認調査のトレンチは現地調査で「1トレ」~「3トレ」とラベルに記されていたが、トレンチの位置を特定できなかったため、やむなく確認調査のトレンチに順次当てはめた。注記はそのままである。
- 4 確認調査で多量の遺物が出土したトレンチがあったが、調査が不可能な区域のグリッド表示であったため、誤記と判断し「表採」として扱った。注記は横線で消しているが元のままである。
- 5 遺構の平面実測図中にセクションポイントの記載のないものが多々あったが、遺構の堆積状況を把握する資料として活用するため掲載した。(この場合図中にSPとのみ記載した。)
- 6 遺構名称は原則現地調査のまま遺物に注記した。※「1号遺構」は「01P」とし、遺構の性格上の区分をしていない。

### 調査の経過

本調査は、調査準備が整った昭和61年10月14日に開始し、同年11月17日すべての調査を完了し、現地を撤収した。整理作業は平成20年1月15日から平成20年12月25日まで実施した。



第6図 本調査区域と検出透析

第1表 下高野新山遺跡 第1次本調査検出遺構一覧表 ( ) 現存または調査区域内で計測できた計測値、( ) 備考

遺構名	略号	種別	位 置 (トリック名)	規模(m)			平面形態	主軸方位	遺構部	時代・時期	備考
				長軸	短軸	深さ					
1号遺構	01P	地下式坑	本E13	2.60	2.18	0.89	側張り方形	(N 2° E)	—	中世	入り口方向不明
2号遺構	02P	地下式坑	本L10・M10	3.58	2.82	1.64	側張り長方形	N 35° W	—	中世	段差深各1.20m
3号遺構	03P	地下式坑	本E9・F9	2.04	1.34	1.05	椿円形	N 0.5° W	—	中世	段差深各約0.84m
4号遺構	04P	土坑	本F8	1.54	1.60	0.36	円形	—	—	绳文	炭化材検出
6号遺構	06FP	炉穴	本D12	2.20	0.90	0.26	長椭円形	S 46° E	1	绳文 早期後葉	
7号遺構	07FP	炉穴	本D12	1.86	0.74	0.22	長椭円形	S 16° E	2	绳文 早期後葉	
8号遺構	08FP	炉穴	本N5	1.50	0.72	0.26	長椭円形	S 85° W	1	绳文 早期後葉	
9号遺構	09FP	炉穴	本N5	(0.92)	0.82	0.38	長椭円形か	(S 82° E)	なし	绳文 早期後葉	半分以上未掘
11号遺構	11FP	炉穴	本N5	2.12	0.96	0.34	変則長椭円形	(S 45° E)	なし	绳文 早期後葉	
12号遺構	12FP	炉穴	本N5	1.70	0.70	0.24	変則長椭円形	(S 71° W)	なし	绳文 早期後葉	
13号遺構	13FP	炉穴	本E11	1.60	0.88	0.40	長椭円形	N 78° E	1	绳文 早期後葉	
14号遺構	14FP	炉穴	本I2	2.28	0.86	0.24	長椭円形	S 87° W	1	绳文 早期後葉	
15号遺構	15FP	炉穴	本K2	2.46	0.86	0.28	長椭円形	S 65° E	2	绳文 早期後葉	
16号遺構	16FP	炉穴	本F11	1.56	0.68	0.10	長椭円形	N 25° W	1	绳文 早期後葉	
17号遺構	17FP	炉穴	本G11	1.95	0.66	0.30	長椭円形	(N 30° E)	なし	绳文 早期後葉	
18号遺構	18FP	炉穴	本H11	2.42	0.94	0.34	長椭円形	(N 17° W)	1	绳文 早期後葉	燃焼部中央のため方位は仮方向とした
19号遺構	19FP	炉穴	本E11	(2.20)	1.00	0.44	長椭円形	S 55° E	2	绳文 早期後葉	
20号遺構	20P	土坑	本H4	1.14	1.23	0.28	円形	—	—	绳文	中央辺土化
21号遺構	21FP	炉穴	本R2	1.52	0.80	0.24	長椭円形	(S 23° E)	2	绳文 早期後葉	両端に燃焼部があるため方位は仮の方向
22号遺構	22P	地下式坑	確H4-4・抜取	2.06	1.24	0.94	椿円形	N 18° W	—	中世	段差深さ約0.60m
23号遺構	23FP	炉穴	本D10・D11	(1.50)	0.80	0.30	長椭円形か	N 76° E	1	绳文 早期後葉	24-2FP重複
24号遺構	24-1FP	炉穴	本D10	1.42	0.80	0.42	長椭円形	N 85° W	1	绳文 早期後葉	24-2FP重複
	24-2FP	炉穴	本D10・D11	(1.60)	0.90	0.44	長椭円形	S 8° W	1	绳文 早期後葉	23FP, 24-1FP重複
その他の検出遺構											
古墳	—	方墳か	確D1	(20.00)	(20.00)	(1.50)	方形	—	—	古墳時代	周囲の形状で判断
方形窓溝	—	方形窓溝	確P6・P7	(9.50)	(9.50)	(0.50)	方形	約55°傾	—	不明	
堅穴住居	—	堅穴住居	確B5-1	6m以上	—	—	方形か	約45°傾	—	不明	
土坑	—	土坑	確A5-4	約1.50	約1.40	—	円形	—	—	不明	
土坑	—	土坑	確E7-2抜張	約1.35	約1.00	—	円形	—	—	不明	

\*炉穴の主軸は燃焼部に向かう長椭円を主軸として捉え、方位を計測した。ただし、燃焼部がない場合には仮の方位として( )をつけて記載した。

\*地下式坑の主軸は入り口と見られる段差がある短軸を主軸として捉え、入り口の段差から内部に向かう方向の方位を計測した。

\*5号遺構・10号遺構は欠番である

## 参考文献

- 八千代市遺跡調査会 2001~2005 「千葉県八千代市上谷遺跡」(仮称) 八千代カルチャーキャンプ実業調査実施報告書告白Ⅱ」第1分冊~第5分冊
- 八千代市遺跡調査会 2005「千葉県八千代市上谷遺跡」(仮称) 八千代カルチャーキャンプ実業調査実施報告書告白Ⅲ」第1分冊本文編
- 八千代市遺跡調査会 2004「千葉県八千代市栗原遺跡・鶴ヶ東遺跡・富津遺跡・雪道跡」(仮称) 八千代カルチャーキャンプ実業調査実施報告書告白Ⅰ」第3分冊
- 八千代市遺跡調査会 2001~2003「千葉県八千代市栗原遺跡」(仮称) 八千代カルチャーキャンプ実業調査実施報告書告白Ⅳ」第1分冊~第2分冊
- 八千代市遺跡調査会 2005「千葉県八千代市栗原遺跡」(仮称) 八千代カルチャーキャンプ実業調査実施報告書告白Ⅴ」
- 八千代市遺跡調査会 2004「千葉県八千代市向ヶ遺跡」(仮称) 八千代カルチャーキャンプ実業調査実施報告書告白Ⅵ」
- 7.財)千葉県文化財センター 2006 「動植物印西遺跡文化財調査報告書Ⅳ」八千代市間見穴遺跡(2)
- 8.千代市教育委員会 1995 「平成6年度『八千代市東葛羅文化財調査年報』」
- 9.千代市教育委員会 1996 「千代市東葛羅文化財調査年報 - 平成6年度版 - 」
- 10.財)千葉県文化財センター 2002~2004 「千葉県文化財センター年報 No.26~No.28 - 平成12年度~平成14年度 - 」
- 11.八千代市教育委員会 2008 「千葉県八千代市 逆水・北浦根・高津根田・西山・内野・攸山・川崎山・ツサル山南遺跡 - 不特定遺跡発掘調査報告書V - 」
- 12.財)千葉県文化財センター 2004 「新東京国際空港 那珂文化財調査報告書XII」 東峰御寺塚東遺跡(空港No.62路跡)】
- 13.佐々木茂ほか 1981 「八千代市の地形・地質」[八千代市文化財総合調査報告書Ⅰ] 八千代市教育委員会

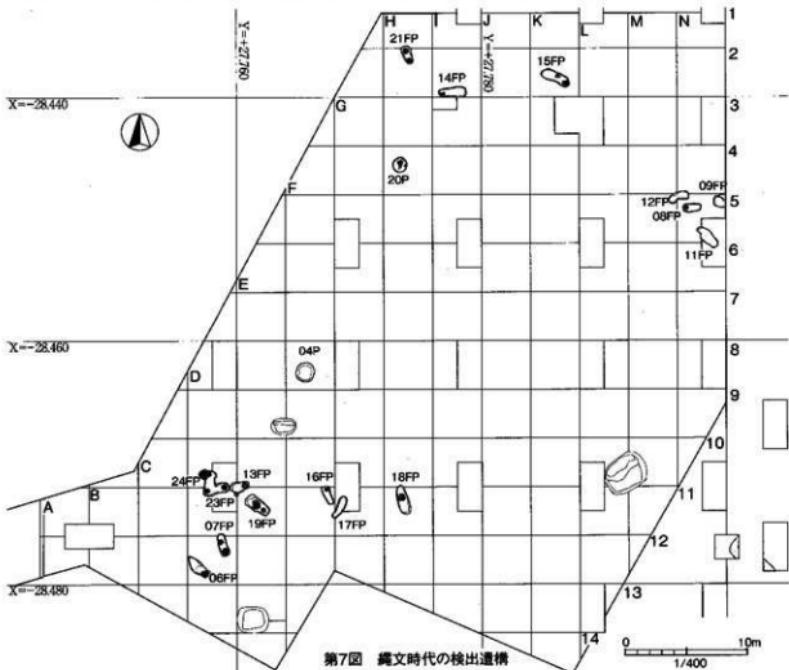
## 第Ⅱ章 繩文時代の概要

縄文時代の遺構はa区及びb区の一部（以下「本調査区域」という。）で炉穴17基、土坑2基が検出されている。また、縄文時代の遺物は確認調査及び本調査において4,973点が出土した。出土総数5,159点の内の約96.4%が縄文時代の遺物で占められていることになる。時期は、早期前葉の撲糸文系土器と中葉の沈線文系に並行する土器、そして、後葉の条痕文系の土器が出土した。前期に属する土器は確認されていない。中期の土器は前葉の阿玉台式土器、後半の加曾利E式土器が出土している。また、後晩期に属する土器は確認できなかった。円形土製品は39点確認できたがすべて早期後葉に属するものであった。石器は石鏃2点のほか打製石斧や磨石などが出土している。

確認調査により本調査区域内で土坑が2基検出されていたが、調査の結果、遺構とは判断されなかった。

### 第1節 遺構

炉穴及び土坑は本調査区域で検出されている。炉穴が17基検出されているが、4つのブロックに区分できる。調査区の南西側に06、07、13、19、23、24-I、24-II号遺構の7基と16、17、18号遺構の3基の2つのブロックがある。北東側に08、09、11、12号遺構の4基、北側に14、15、21号遺構の3基がそれぞれまとまりをもって検出されている。その他土坑が調査区中央で04、20号遺構の2基が検出されている。



## 1 炉穴

06号遺構 (06FP) (第8、9図・図版2-1、2-2、5-1)

位置 本D12グリッド 規模 (長) × (幅) × (深さ) 2m20cm × 90cm × 26cm

形状 長椭円形 主軸方位 S 46° E

土層 土層の変化が乏しいが、自然埋没であろうか。北西端側に粘土の混入が多くみられる。

内部構造 南東側の底面に厚く焼土化した燃焼部を持つ。

遺物出土状況 59点出土。擾乱を受けており一部は元の位置にない。内訳は条痕文土器片57点、須恵器1点、黒曜石剥片(14)1点である。南東側の燃焼部側に多くの遺物が出土する傾向がみられた。燃焼部上面で(1)、(2)が半完形で出土する。(13)は円形土製品である。

07号遺構 (07FP) (第8、9図・図版2-3、5-2)

位置 本D12グリッド 規模 (長) × (幅) × (深さ) 1m86cm × 74cm × 22cm

形状 長椭円形 主軸方位 S 16° E

土層 覆土は浅いが、自然埋没であろうか。

内部構造 南東側先端の底面に焼土化した燃焼部があり、中央部底面も焼土化し、燃焼部であろうか。

遺物出土状況 8点出土。すべて条痕文土器片である。ほとんど中央の焼土付近の直上から出土する。

08号遺構 (08FP) (第10、11図・図版2-4、5-2)

位置 本N5グリッド 規模 (長) × (幅) × (深さ) 1m50cm × 72cm × 26cm

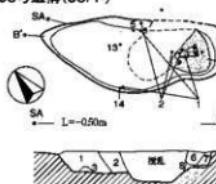
形状 長椭円形 主軸方位 S 85° W

土層 自然埋没とみられる。

内部構造 西側先端の底面に焼土化した燃焼部を持つ。断面形状が箱状を呈している。

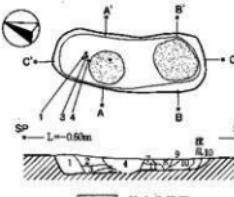
遺物出土状況 57点出土。すべて条痕文土器片である。出土位置は全体に分散しているが、上層からの流れ込みと推定される。

### 06号遺構(06FP)



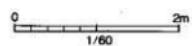
06FP	
1層	褐色土 粘土多い、炭化較少わずか、焼土粒子少量 しまり良く、粘性強い
2層	暗褐色土 燒土粒子わずか、ローム粒子少 しまり良く、粘性強い
3層	褐色土 燒土粒子多 しまり良く、粘性強い
4層	褐色土 燒土粒子少 しまり良く、粘性強い
5層	褐色土 燒土粒子多 しまり良く、粘性強い
6層	褐色土 燒土粒子少 しまり良く、粘性強い
7層	褐色土 燒土粒子多 しまり良く、粘性強い
8層	褐色土 燒土粒子多 しまり良く、粘性強い

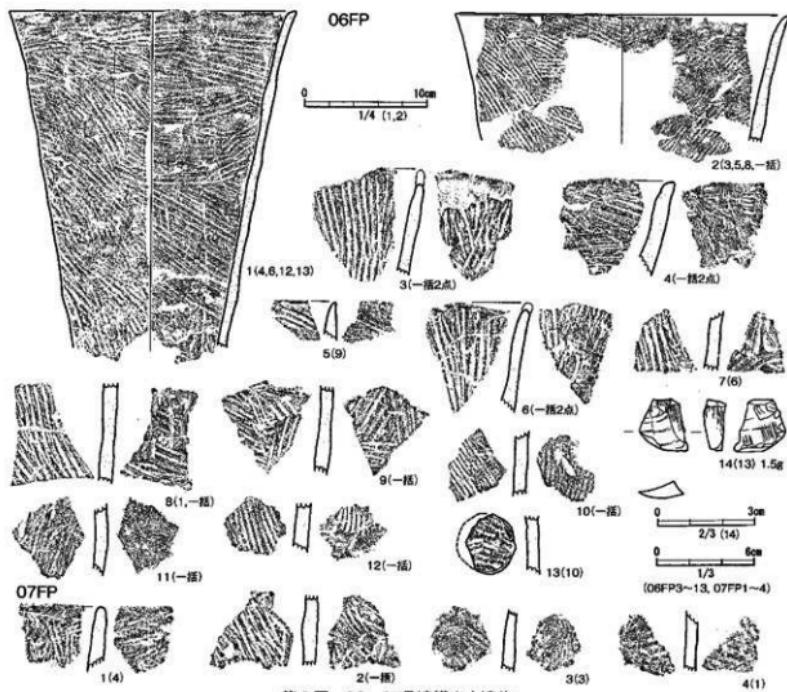
### 07号遺構(07FP)



07FP	
1層	褐色土 ローム粒子多い、褐色土質少量 しまり良く、粘性強い
2層	褐色土 1層に同じだが、褐色土わずか
3層	褐色土 1層に同じだが、燒土粒子わずか
4層	褐色土 ローム粒子・ブロック、燒土粒子わずか しまり良く、粘性強い
5層	褐色土 4層に同じだが、燒土粒子多い
6層	褐色土 褐色土粒子わずか
7層	褐色土 褐色土粒子少 しまり良く、粘性強い
8層	褐色土 褐色土粒子少 しまり良く、粘性強い
9層	褐色土 ローム粒子多 しまり良く、粘性強い
10層	褐色土 ローム粒子少 しまり良く、粘性強い
11層	褐色土 ローム粒子少 しまり良く、粘性強い

第8図 06・07号遺構





第9図 06・07号造構出土遺物

## 09号造構 (09FP) (第10、11図・図版5-3)

位置 本N5グリッド

規模 (長) × (幅) × (深さ) [92cm] × 82cm × 38cm

形状 半分程度調査、長楕円形状か

主軸方位 (S 82° E)

土層 自然埋没であろう。

内部構造 全体は不明。検出された部分で燃焼部はみられない。

遺物出土状況 8点出土し、すべて条痕文土器片である。下層から上層までまばらに出土。(1)は波状口縁の波状部の破片で、細隆起線文で区画し、集合沈線を充填する。

## 11号造構 (11FP) (第10、11図・図版2-5、5-3)

位置 本N5グリッド

規模 (長) × (幅) × (深さ) 2m 12cm × 96cm × 34cm

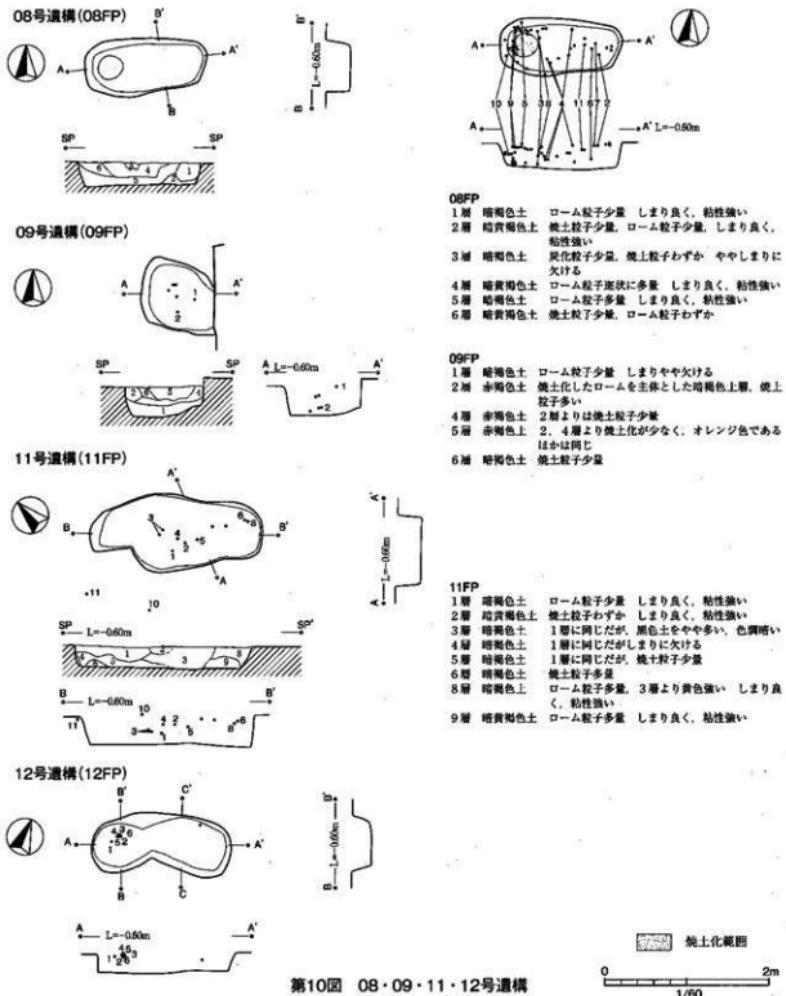
形状 変則な長楕円形状

主軸方位 (S 45° E)

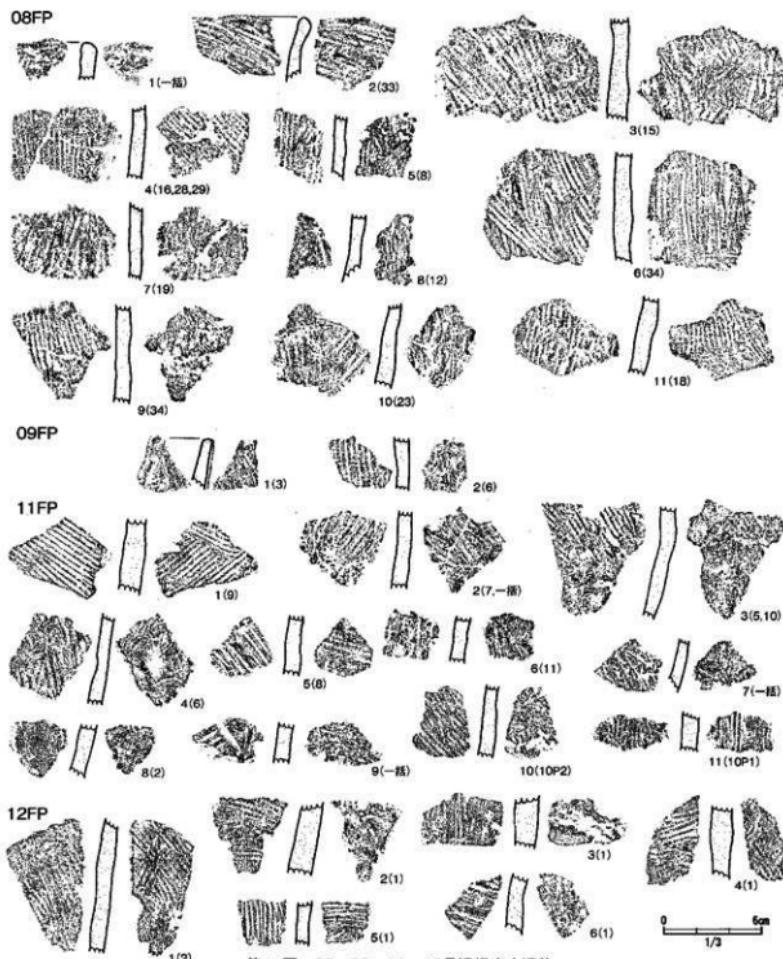
土層 全体に同質の上層であり、人為的埋め戻しの可能性もある。

内部構造 底面に燃焼部を確認できなかった。

遺物出土状況 造構内からは24点出土し、すべて条痕文土器片であったが、擦痕のみのものも含まれている(8)。(10)、(11)は造構外から出土。造構と判断されなかった10号造構から出土したものである。



第10図 08・09・11・12号遺構



第11図 08・09・11・12号遺構出土遺物

13号遺構 (13FP) (第12、13図・図版2-7、5-4)

位置 本E11グリッド

規模 (長)×(幅)×(深さ) 1m60cm×88cm×40cm

形状 長楕円形状

主軸方位 N78° E

上層 自然埋没

内部構造 東側の底面に焼土化した燃焼部をもつ。

遺物出土状況 確認面の形状が不明確なため遺構外の遺物を含む。総数64点出土。燃焼部直上層からの出土もみられる。条痕文土器が53点、早期中葉に属するものが10点、擦痕のみられる砂岩が1点出土。

## 19号遺構 (19FP) (第12、13図・図版3-3、5-4)

位置 本E11グリッド

規模 (長) × (幅) × (深さ) (2m20cm) × 1m × 44cm

形状 長楕円形 北西側の立ち上がりが不明確であり不確実 主軸方位 S55°E 土層 自然埋没か 内部構造 東側底面に焼土化した燃焼部をもつ。また、中央部にもより大きな範囲で焼土化面を検出する。

遺物出土状況 一括遺物が10点出土。条痕文土器が7点、3点は粘土塊であった。口縁部片は条痕のみ。

## 23号遺構 (23FP) (第12、13図・図版2-7、5-4)

位置 本D10・D11グリッド

規模 (長) × (幅) × (深さ) (1m50cm) × 80cm × 30cm

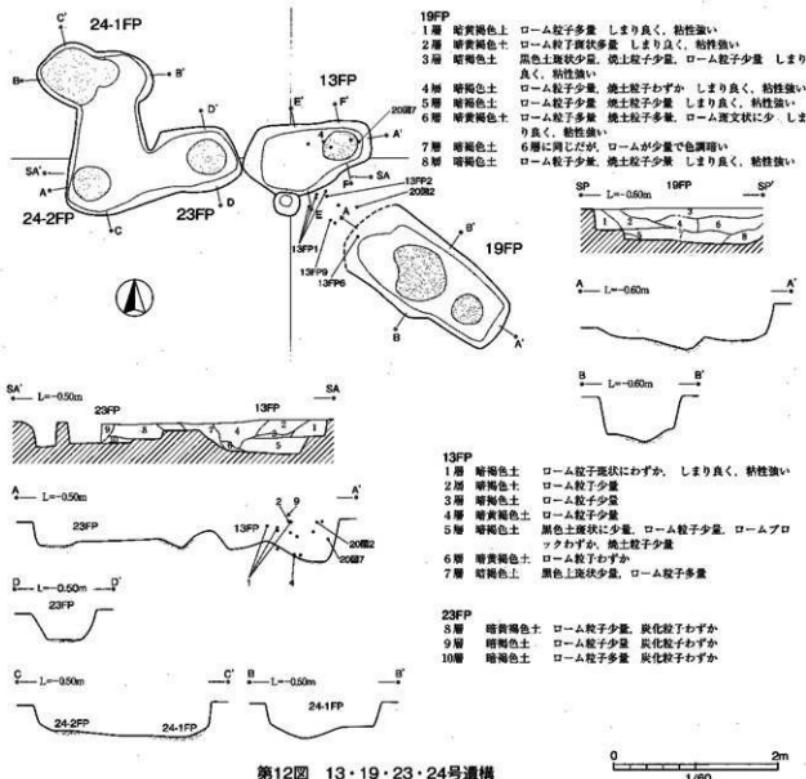
形状 長楕円形としたが、西側は24-2FPと重複しており不明 主軸方位 N76°E 土層 一部調査 内部構造 東側底面が焼土化した燃焼部をもつ。

遺物出土状況 一括遺物が12点出土。すべて条痕文土器であった。ほとんどが条痕のみの破片である。

## 24号遺構 (24-1, -2FP) (第12、13図・図版2-7、5-4)

24-1FP 位置 本D10グリッド

規模 (長) × (幅) × (深さ) 1m42cm × 80cm × 42cm



第12図 13・19・23・24号遺構

形状 長楕円形状としたが、やや寸詰まり。南側から24-2FPが重複、前後関係は不明である。

主軸方位 N85°W 土層 不明 内部構造 西側底面の大半が焼土化し、大きな燃焼部をもつ。

24-2FP 位置 本D10・D11グリッド 規模 (長)×(幅)×(深さ) (1m60cm)×90cm×44cm

形状 長楕円形状としたが、北側に24-1FP、東側から13FPが重複、前後関係は不明である。

主軸方位 S8°W 土層 不明 内部構造 南側底面が焼土化し、燃焼部となる。

遺物出土状況 一括遺物20点出土。24FPのいずれに属するかは不明。大半は条痕文のみの土器片、口縁部(1)は口唇に刻みがみられる。

#### 14号遺構 (14FP) (第14、15図・図版2-8、5-5)

位置 本I2グリッド 規模 (長)×(幅)×(深さ) 2m28cm×86cm×24cm

形状 長楕円形状 主軸方位 S87°W 土層 自然埋没したものと推定される。

内部構造 東側底面が一部焼土化しており、燃焼部となる。

遺物出土状況 24点出土。ほとんどすべての遺物が燃焼部側の上層から出土する。黒曜石片(8)の1点のはかはすべて条痕文のみの土器片である。

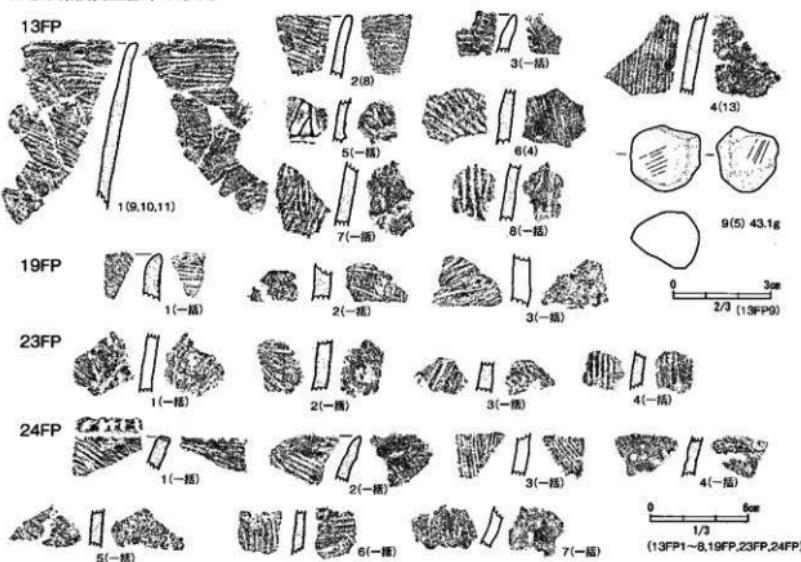
#### 15号遺構 (15FP) (第14、15図・図版5-5)

位置 本K2グリッド 規模 (長)×(幅)×(深さ) 2m46cm×86cm×28cm

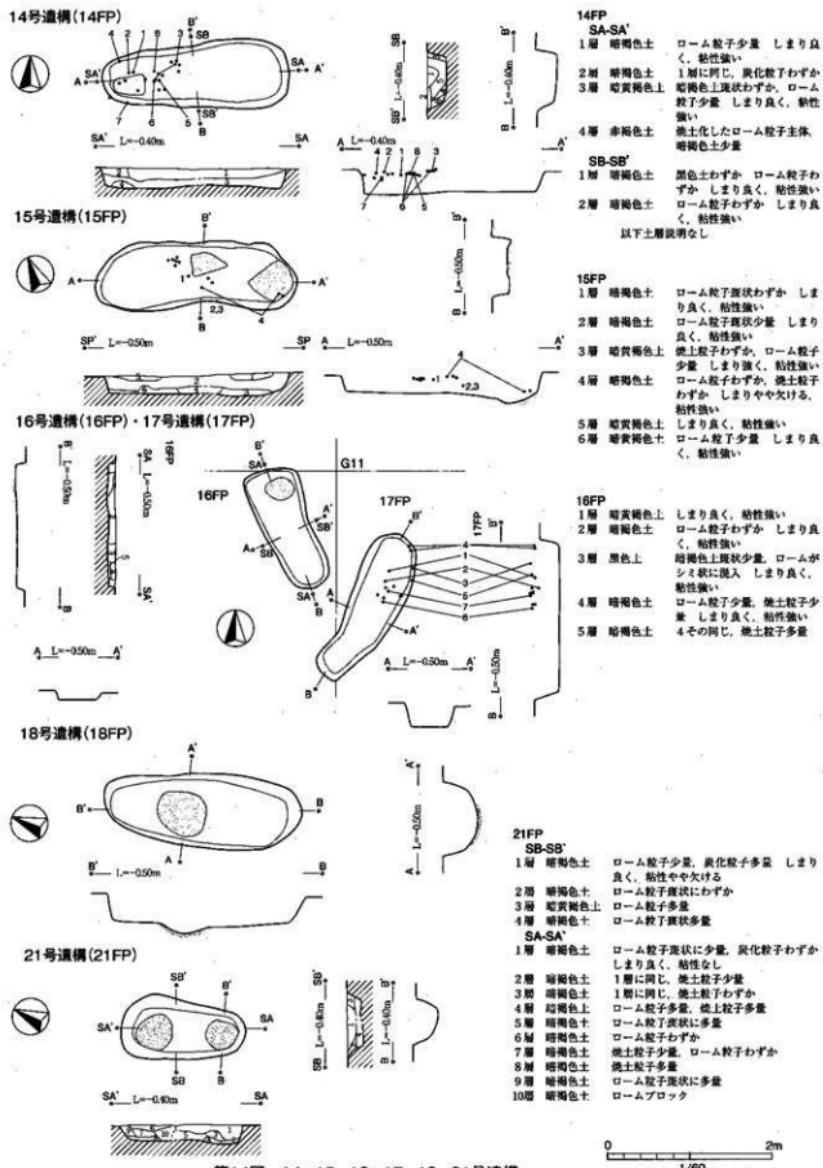
形状 長楕円形状 主軸方位 S65°E 土層 自然埋没したものと推定される。

内部構造 南東側底面が焼土化した燃焼部をもつ。中央部にもやや小さい焼土化した部分を検出する。

遺物出土状況 21点出土。多くが中央上層から出土。2点のみ南東端の燃焼部直上層から出土する。ほとんどが条痕文土器片である。



第13図 13・19・23・24号出土遺物



第14図 14・15・16・17・18・21号遺構

## 16号遺構 (16FP) (第14、15図・図版3-1)

位置 本F11グリッド 規模 (長)×(幅)×(深さ) 1m56cm×68cm×10cm

形状 長楕円形状 主軸方位 N25°W 土層 自然埋没か。

内部構造 北西側底面に焼土化した燃焼部を検出する。 遺物出土状況 出土遺物なし。

## 17号遺構 (17FP) (第14、15図・図版5-5)

位置 本G11グリッド 規模 (長)×(幅)×(深さ) 1m95cm×66cm×30cm

形状 長楕円形状 主軸方位 (N30°E) 土層 不明

内部構造 燃焼部は検出されなかった。

遺物出土状況 41点出土。上層からの出土が多い。縞1点、他は条痕文土器片である。

## 18号遺構 (18FP) (第14、15図・図版3-2)

位置 本H11グリッド 規模 (長)×(幅)×(深さ) 2m42cm×94cm×34cm

形状 長楕円形状 主軸方位 (N17°W) 土層 不明

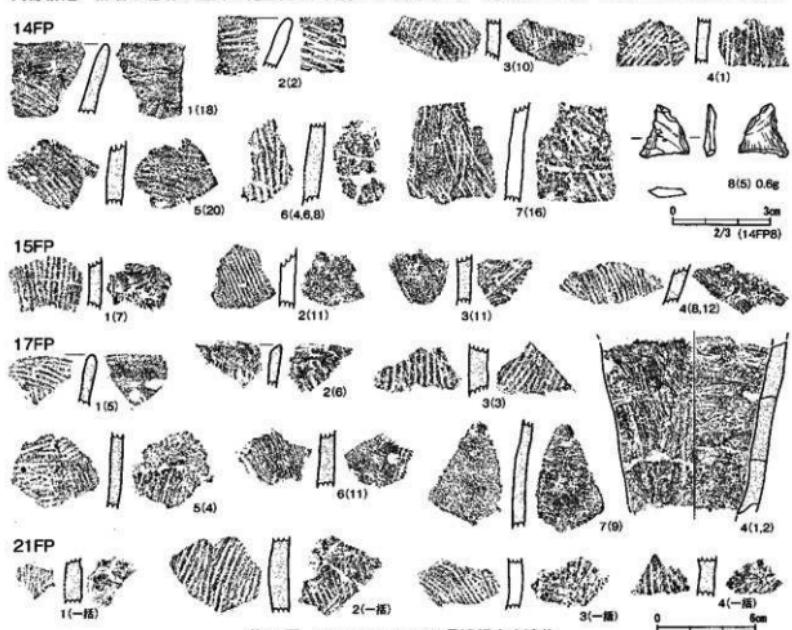
内部構造 中央部で底面が焼土化しており、燃焼部とみられる。 遺物出土状況 出土遺物なし。

## 21号遺構 (21FP) (第14、15図・図版5-5)

位置 本H2グリッド 規模 (長)×(幅)×(深さ) 1m52cm×80cm×24cm

形状 長楕円形状 主軸方位 (S23°E) 土層 自然埋没であろうか

内部構造 南端と北端の底面が焼土化し、両方とも燃焼部か。 遺物出土状況 11点出土。条痕文土器片。



第15図 14・15・17・21号遺構出土遺物

(14FP1~7,15FP,17FP,21FP)

## 2 土坑

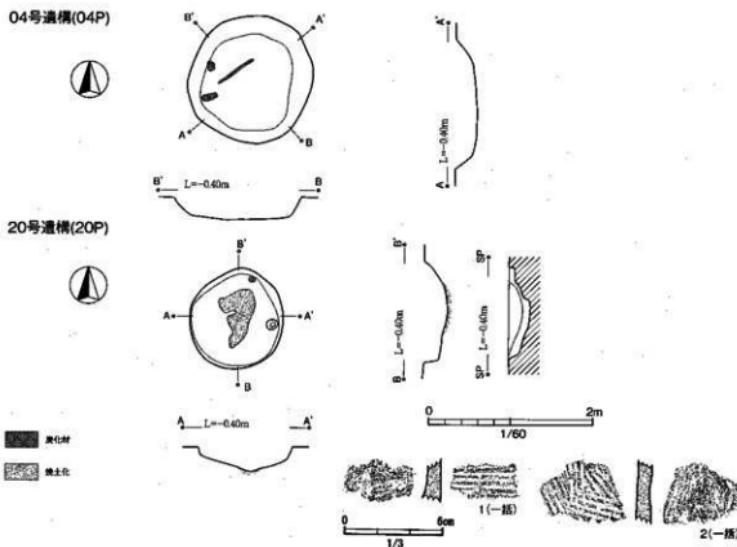
土坑は本調査区域の中央から2基検出されている。04号遺構は遺構内からの出土遺物はみられないで、時期を特定する根拠はないが、調査時の所見により、純文時代の所産とした。

### 04号遺構 (04P) (第16図・図版3-4)

位置 本F8グリッド  
規模 (径) × (径) × (深さ) 1m54cm × 1m60cm × 36cm  
形状 円形 断面は皿状  
土層 不明  
内部構造 燃焼部などは検出されていない。  
遺物出土状況 底面から炭化材が出土したが、その他に出土遺物ない。

### 20号遺構 (20P) (第16図・図版3-5)

位置 本H4グリッド  
規模 (径) × (径) × (深さ) 1m14cm × 1m23cm × 28cm  
形状 円形 断面は皿状  
土層 土層説明不明  
内部構造 土坑中央の底面に焼土化した範囲がみられる。  
遺物出土状況 一括出土遺物2点出土。いずれも条痕文土器片であった。



第16図 04・20号遺構

## 第2節 遺物包含層と出土遺物

確認調査及び包含層の調査において出土した縄文土器は、総数で4,973点である。そのうち早期に属する土器は4,895点、縄文土器に占める割合では約98.4%となる。また、中期の土器は19点、約0.38%を占めている。前期、後期、晚期の土器は検出されていない。石器及び礫は141点出土しているが、石錐や石斧などの石器は10点しかなく、残りはすべて礫であった。

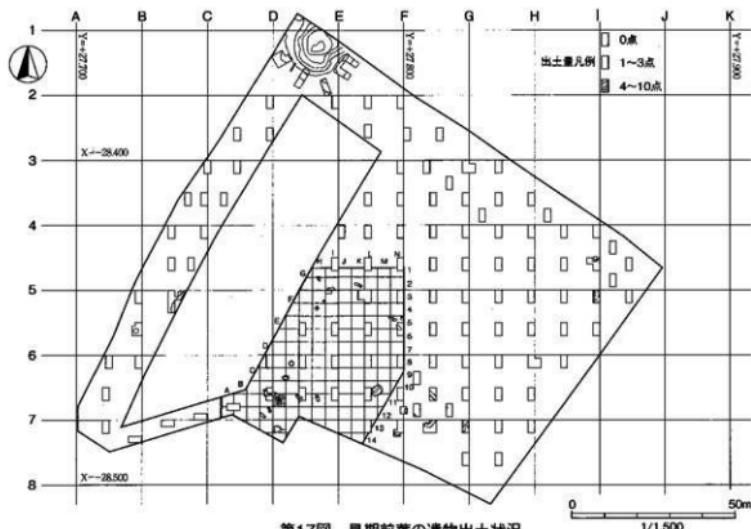
出土状況は土器の数量をグリッドのアミの濃淡により表示した。土器の大小やグリッドの広狭があり、単純には比較できないものの、全体的な傾向を把握するため便宜的に用いた。しかし、早期中葉は遺物量が少なく、出土範囲も狭かったので、出土地点周辺を拡大して、出土地点をドットで表示した。早期後葉は包含層調査区域の詳細な傾向を把握するため、出土地点の全点をドットで掲載した。調査区域の全体的な傾向は第IV章に別途周辺区域の出土状況とあわせて掲載している。

### 1 早期前葉（燃糸文系土器群）（第17、18図・図版6-1）

この時期に属する土器は76点が確認されている。早期の中では約1.55%と少ない。

出土傾向は、調査区全体からみると、散漫で集中的なまとまりはみられない。この時期の土器が出土したグリッドまたはトレントからは1~2点出土するのが大半であったが、確H5-2トレント及び本E11グリッドで5~6点出土していたのが最も多かった。

1~9は口縁部である。1~6、8は口唇部で肥厚し、外側に屈曲する。7、9はほとんど肥厚せずに、7はわずかに屈曲し、9は屈曲が激しい。1~6の口唇部に単節RLを施す。3、5、6は縄文原体の圧痕を口縁下に1段または2段に施す。口縁部下には無文帯をもつものが多く、その下に横走または斜走する単節RLにより縄文を施す。3は無文帯をもたない。8、9は無文帯の幅が広い。ただその下は欠損によ



第17図 早期前葉の遺物出土状況

り縄文については不明である。10から27は胴部の破片である。10、11は口縁部下に横位または斜位に縄文を施文する。12も口縁部直下に縄文原体の圧痕を施文している。13～27は単節RLまたは撲糸Lを縦に施文する。1～6、8、9は井草I式、7は井草II式に相当する。12は花輪台式、13は稻荷台式であろうか。



第18図 純文土器1（早期前葉）

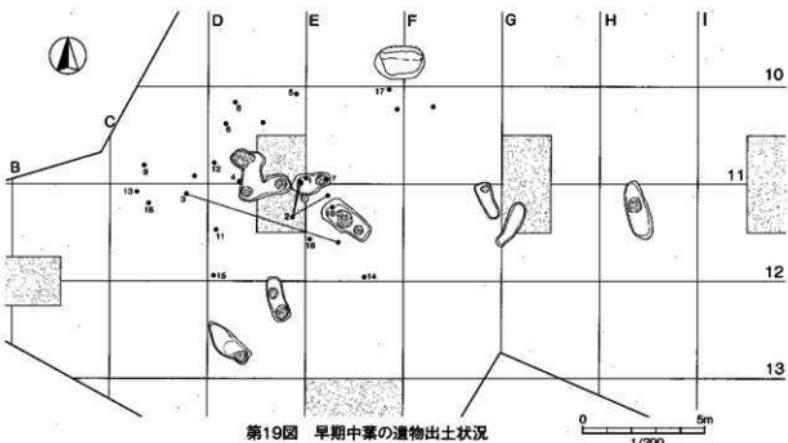
1/3

## 2 早期中葉（第19、20図・図版6-2）

早期中葉は沈線文土器群とされているが、本遺跡からは確認されていない。しかし、波状口縁にV字状押し引き線をもつ一群が出土している。

この一群の土器は、確認された破片数で34点であった。早期の中で約0.69%を占めている。

確認調査時点では全く出土していなかったが、包含層調査により本C10・C11グリッド、本D10・D11グリッド、本E10・E11グリッド、本F10グリッドの比較的狭い範囲で出土した。ほとんどが包含層内で



第19図 早期中葉の遺物出土状況

1/200

出土しているが、13FP内からも10点出土していた。(第12図参照)

1は口縁部片、2~18は胴部片である。周辺から底部片は確認されていない。すべて同一個体と思われる。1は口唇に沿って先端のとがった工具により、2列の連続刺突文を廻らす。刺突は深く、断面形状が三角形を呈する。その下に同様の工具で2列の深い沈線を同様に廻らす。この沈線は波状部で短く垂下する。2本目はこの垂下する沈線の外側に沿って、なぞるように廻る。その下位には地文の表れる無文部を残す。地文は櫛齒状の工具により縦位に荒い擦痕で整形される。無文部の下位には口縁部文様と同様の工具により、深い沈線を3列から4列めぐらす。沈線は断続的に引かれている。内面はていねいにナデ整形される。

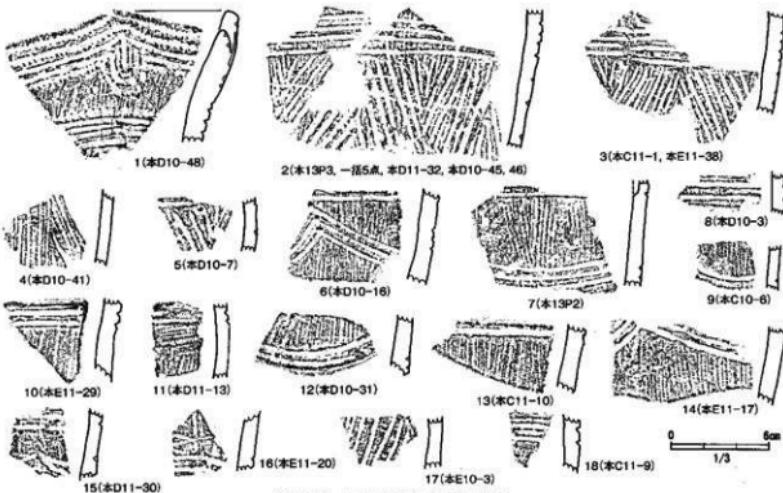
2、3は1の下端でみられた3~4列の横位の断続的な沈線が破片上端に施文される。この沈線の下位には6~8本単位で鋸刃状に山形を連結させる。地文には1と同様の荒い擦痕がみられ、内面も同様にていねいなナデで整形される。4、5、17も同様に鋸刃状の沈線部分の破片である。

6~14は2~5の下位に続くものと推測される。地文は前述のものと同様に整形されている。模様構成は破片上部に横位の2~4本の深い沈線が廻り、その沈線に接するように3本単位の深い沈線で弧線を連続的に描き、廻る。沈線が深く抉られているため、12、13、14は沈線の部分で折れるように破損している。

15、16、18も同様に地文整形され、深い沈線が規則的に廻っている。

胎土は精製された粘土を用いており、白色砂粒がやや多く混入される。焼成は良好である。色調は外面が橙(5YR6/8)、内面も橙(5YR7/6)が多い。

これらは東北地方で確認される明神裏Ⅲ式土器またはその系統の土器とみられる。



第20図 繩文土器2 (早期中葉)

### 3 早期後葉 (条痕文系土器群) (第21~27回・図版6-3~6, 7-1~6)

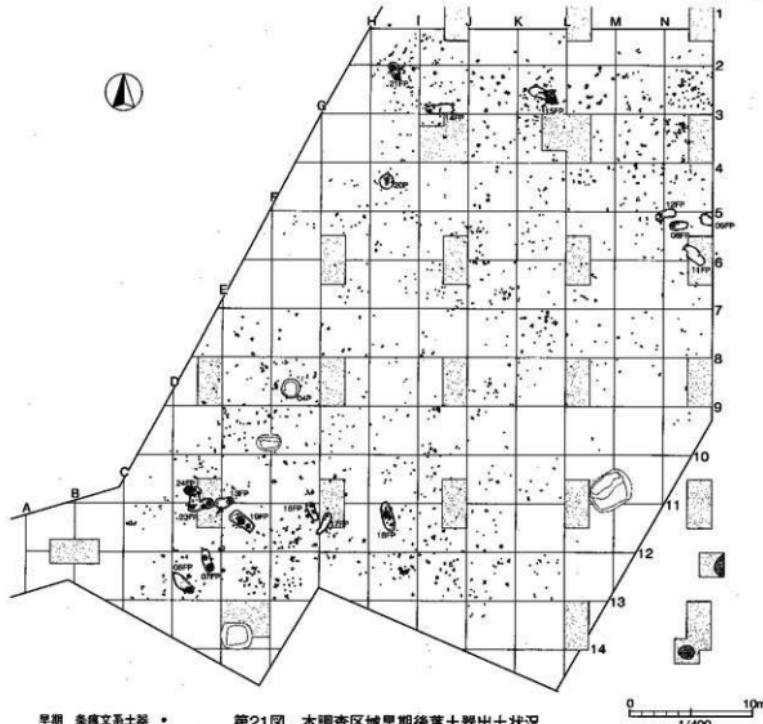
条痕文系に属する土器は出土した遺物の主体を占めていた。破片数では4,785点が出土し、早期の土器総数に対して97.75%であった。調査区全体の出土傾向(第36回参照)は確認調査と本調査区域を単純に比較

はできないが、調査区の南半に多く出土する傾向がみえる。

包含層調査区域(第21図)では、北側と南側の両端部に多く出土する傾向がみられる。北側には本H2グリッド、本K2グリッド、本N2グリッドを中心とする3ヵ所で多く出土する。南側では本D10グリッド、本F11・12グリッド、本H12グリッドを中心とする3ヵ所で集中的に出土している。また、これら調査区両端の集中区とは別に中間の区域、本F8グリッドの地点でもやや多く遺物が集中する傾向をみることができた。それぞれの遺物集中区には遺構を伴うブロックもある。本H2ブロックでは21FPを伴い、14FPに隣接している。本K2ブロックでは15FPを伴う。本D10ブロックでは13FP・23FP・24FPを伴っている。本F11・12ブロックには16FPと17FPが伴い、遺物の出土の広がりはほかのブロックに比較して広い。19FPは本D10と本F11ブロックの中間に位置する。本H12ブロックでは18FPが隣接する。本F8ブロックでも土坑の04Pが伴っていた。本N2ブロックには調査区域内では遺構を伴っていなかった。

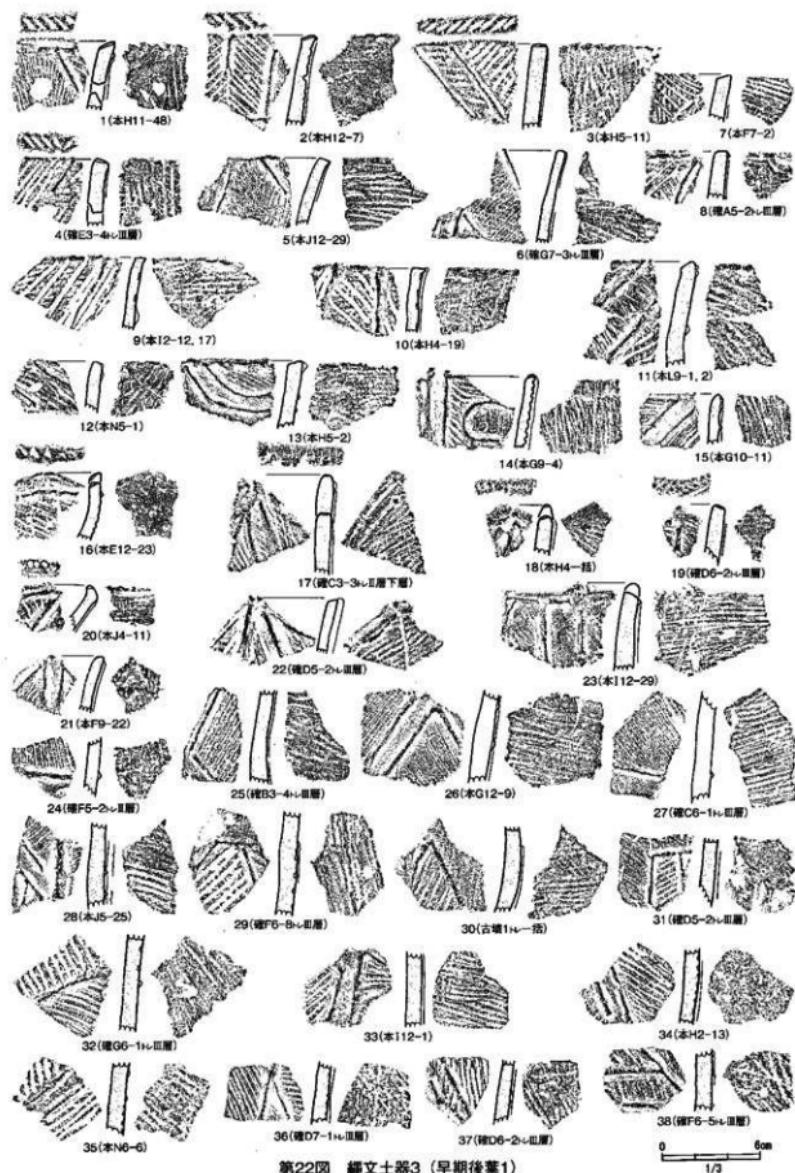
一方、08FP・09FP・11FP・12FPが検出された本N5グリッドや06FP・07FPが検出された本D12グリッド、さらに20Pが検出された本H4グリッドでは集中的な遺物の出土はみられない。

出土遺物は、細隆起線文と集合沈線文により文様を構成するもの(第22~23図1~62)、細隆起線文と微隆起線文との組み合わせで文様を構成しているもの(第23図63~67)、隆起線文と他の要素が加わって文様を構成



早期 条痕文系土器

第21図 本調査区域早期後葉土器出土状況



第222図 縄文土器3（早期後葉1）

しているもの(第23図68~70)。太い沈線または沈線と集合沈線により文様が構成されるもの(第23図71~74)がある。さらに内外面ともに貝殻条痕文のみで文様構成を持たないもの(第24図75~104)や条痕文すらみられず無文ないしは擦痕のみの土器群(第25図105~139)も出土している。

1~62(第22、23図)は細隆起線文で区画を描き、区画内に集合沈線文を充填することにより、文様を表現している。区画内で集合沈線の方向を変化することや無文帯を入れることにより多様な文様を構成する。整形は内外面とも条痕文により横位または縦位に整形されているものが多い。無文帯を残すものには条痕文が残存している。ほとんどの土器の胎土中には多くの纖維が混入されている。

1~23(第22図)は口縁部の破片である。1~4は平口縁であり、平らに成形された口唇部に竹管により斜位に刻みを入れる。4の刻みは逆方向の刻みもみえる。1, 2の集合沈線は細く、3, 4はやや太目のものである。1には内外面から穿孔されており、補修孔であろうか。2には外面より途中まで穿孔の跡がみられる。5~15も平口縁であるが、平らに成形されても口唇部に刻みを付さない。9~11の集合沈線は太く、11の沈線はヘラ状工具を斜めにして太めの沈線を施す。13, 14の細隆起線文は曲線的に文様構成をする。特に14は縦位の2本の細隆起線文が口縁から突出し、内側に無文帯を残す。16~20は波状口縁で口唇に刻みを付す。20は大きく開く口縁が内側に屈曲する。22は波状口縁であるが口唇部の刻みはない。23は平口縁に突起を持つものである。

24~48(第22、23図)は細隆起線文と集合沈線文により文様を構成するものの頸部から胴部片である。集合沈線にも細いものから太目のものまで存在する。28は縦位に背の高い隆起文で左右を分割する。隆起文の頂点に刻みが付されている。39~48は細隆起線文が曲線的な文様構成をしており、内側または外側に集合沈線を充填する。46, 47は集合沈線が交差し格子目状に充填する。

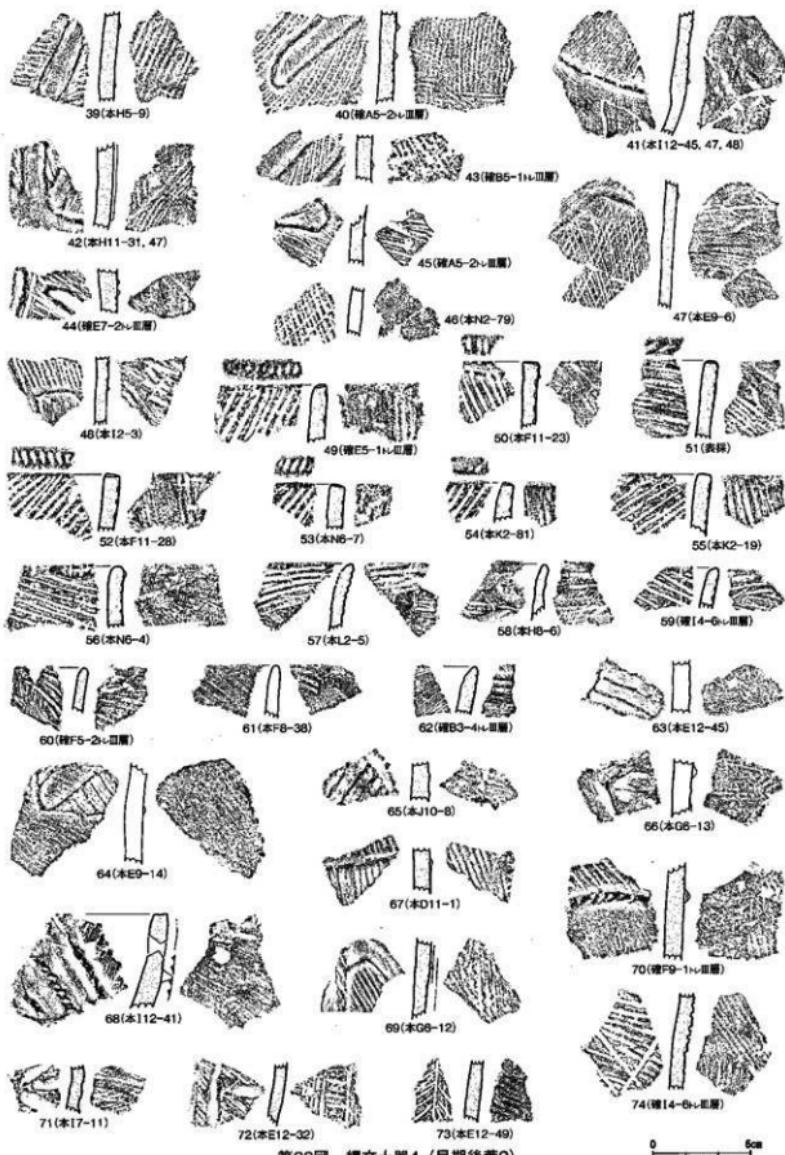
49~62(第23図)は細隆起線文と集合沈線文により文様を構成するものと思われるが、細隆起線文の部分が欠落しているためか、集合沈線のみの破片である。49~54は平口縁で平らに整形された口唇に竹管による刻みが付される。刻みは斜位あるいは縦位に付されている。55~62には刻みはない。口唇部の形状は円頭状のものや内渦ぎ状のものがある。61は沈線が斜位に施され、胎土に纖維を含まず、砂粒の混入がみられる。やや異質な感がある。

63~67(第23図)は細隆起線文により区画し、微隆起線文を粗く充填している。63, 64, 66は胎土中に纖維がみられず、砂粒が混入される。内面は擦痕や条痕文が斜位または横位に整形される。

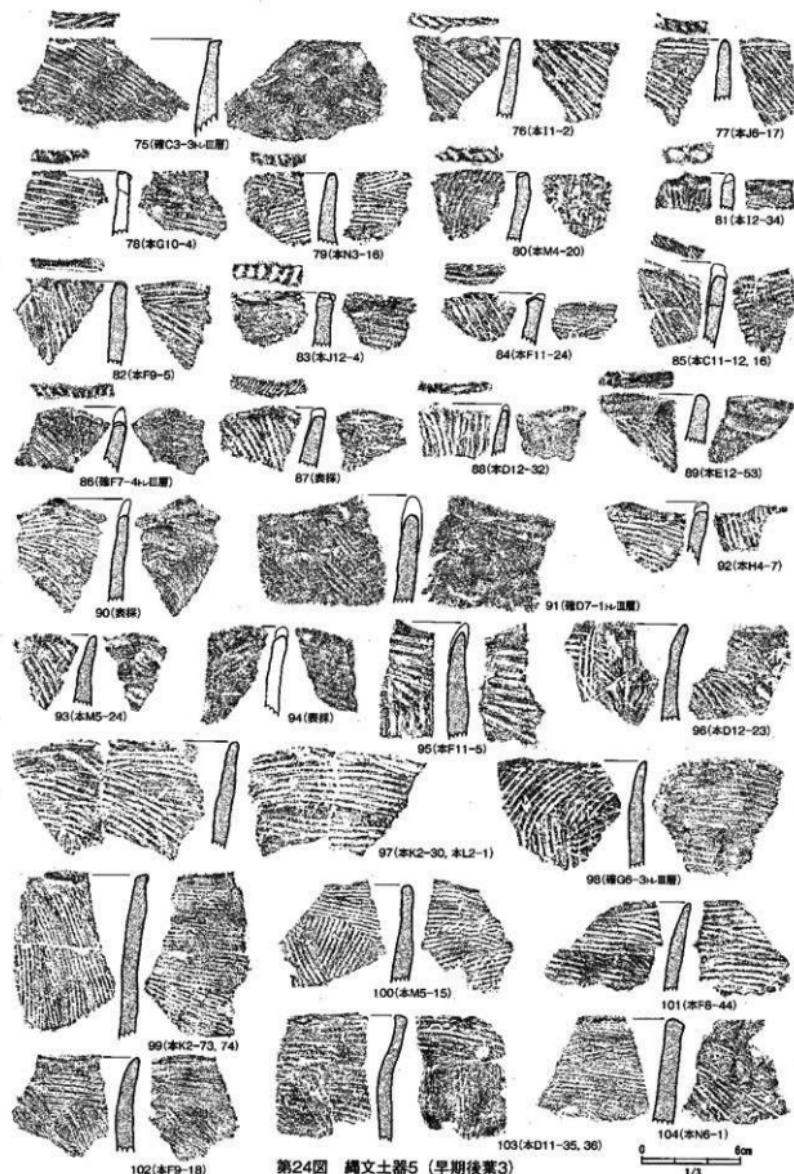
68~70(第23図)は背の高い隆起文で上下または左右を分割し、細隆起線文と集合沈線文により文様を構成する。隆起文の頂点には68, 70のように刻みを付すものもある。68は口縁部片であるが、口唇の刻みがなく、内外面から穿孔された補修孔がある。

71~74(第23図)は全体的な文様構成が不明な部分もあるが、沈線により区画し、集合沈線を充填するものである。71, 72は区画する沈線が指頭によるものか太い沈線が用いられている。73, 74は区画する沈線と同様の集合沈線を用いて模様が構成される。

75~104(第24図)は内外面ともに貝殻条痕文のみの口縁部片である。一部に内面を擦痕または無文のままでのものもある。75から83は平口縁で口唇部に刻みなどが付される。78は口唇に工具の鋭角な角で刺突する。81は口唇に指頭により凹凸を付け、刻みと同様の装飾効果をもたらす。82の口唇には刻みというよりも条痕による整形が付されたとみるべきかもしれない。口縁の形状は器形にわずかにゆがみがあり、緩やかな波状を呈する口縁とも見える。83の刻みは口縁に対して縦位に付す。それ以外の口唇の刻みは竹管に



第23図 繪文土器4（早期後葉2）

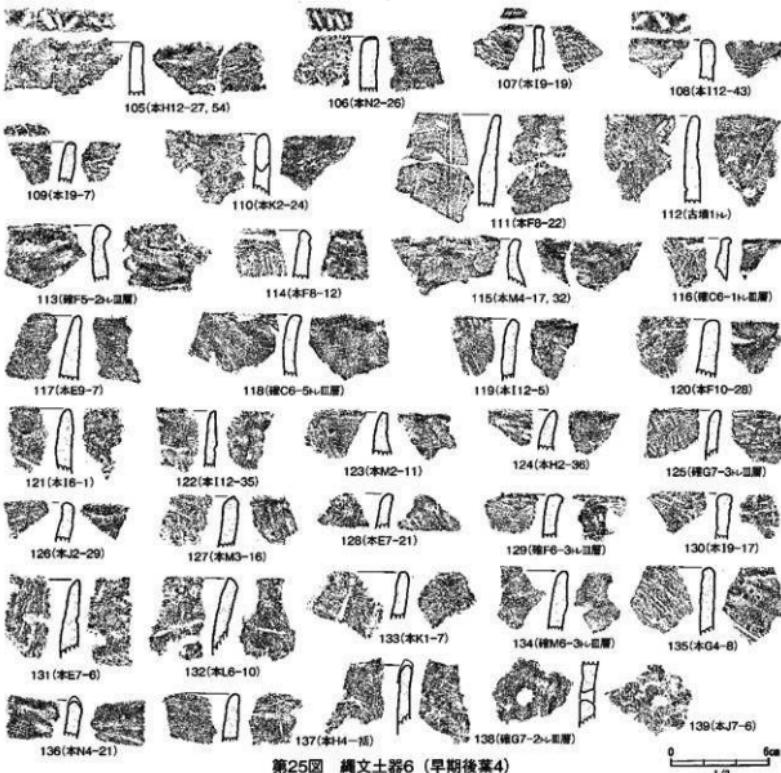


第24図 縄文土器5（早期後葉3）

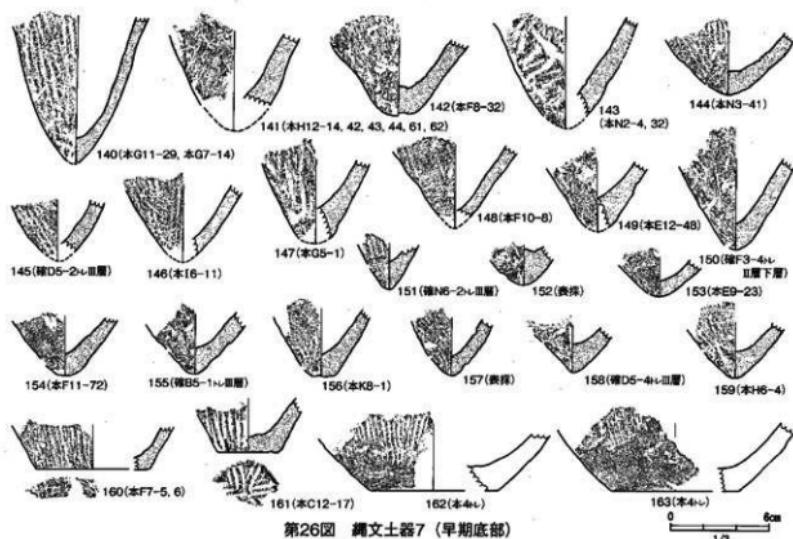
より斜位に付される。84~89は波状口縁の口唇に刻みを付す。刻みは半口縁と同様に口唇にまで条痕文が及ぶもの(84~88)、縦位のもの(89)、斜位のもの(85~87)がみられる。85、87の刻みは細かい刻みを密に付す。90~95は口唇に刻みのない波状口縁である。96~104は口唇に刻みのない平口縁の破片である。

105~139(第25図)は無文ないしは擦痕のみの口縁部片と脇部片である。105から135は平口縁である。105から109は口唇に刻みが付される。105、108の刻みは厚い板状の工具端を互い違いに押し付けている。106は棒状工具を前後にローリングさせて刻みを付す。107は細かい刻みを密に付す。136~138は波状口縁である。口唇に刻みが付されるものはみられない。139は内外に擦痕ないし無文で整形される脇部片であるが、内外両方向から補修孔が穿孔されている。

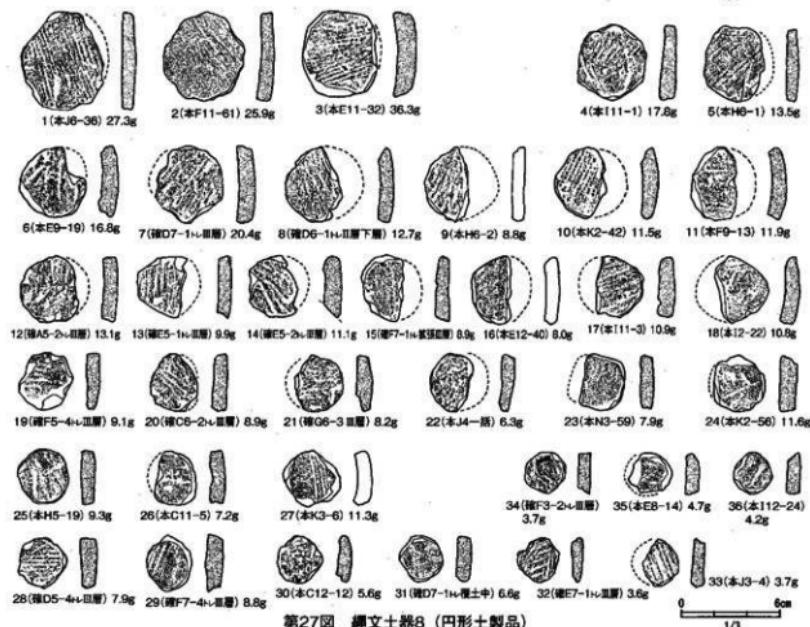
140~163(第26図)は早期の底部片である。140~159は条痕文土器の尖底である。ほとんどの胎土に纖維が混入される。160、161は条痕文がみられる平底の土器片である。纖維の混入もみられる。条痕文は底部周辺と底面に付される。162、163も平底であるが纖維は混入されない。条痕あるいは櫛歯状工具による擦痕がみられ、内面も丁寧なナデ整形である。早期中葉の底部の可能性があるが、出土地点が離れている。



第25図 繩文土器6 (早期後葉4)



第26図 縄文土器7(早期底部)



第27図 縄文土器8(円形土器製品)

#### 4 土製品（第27、29図・図版8-1）

出土する土製品は円形土製品である。整理作業によって確認できた39点の内ここでは36点を図化した。本調査区域から出土した状況は第29図に示した。その他に06FPから1点出土している（第9図）。これらの円形土製品は表裏とも条痕または擦痕で整形され、胎土に多くの繊維が混入しているものがほとんどであった。本遺跡の主体となる早期後葉の土器片の加工品である。利用も同時期の所産と考えられる。

1～36（第27図）の円形土製品を便宜上、大きさにより区分した。特大としたものは55mm前後のもので、1～3が相当する。実測値は53mm～59mmである。大は45mm前後のものとした。4～11である。これらの実測値は43mm～47mmである。中大は40mm前後のものとした。12～18である。実測値は37mm～41mmの大きさである。中は35mm前後のものとした。19～27である。実測値は33mm～36mmのものがみられた。小は30mm前後のものとした。28～33である。実測値は28mm～31mmのものがみられる。極小としたものは25mm前後のものである。34～36である。実測値は25mm～26mmであった。

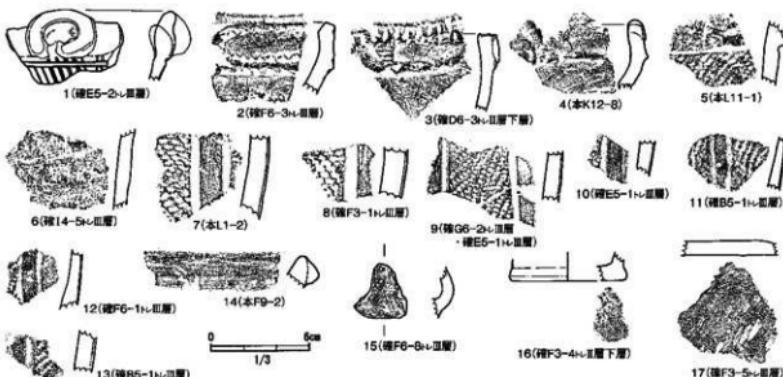
#### 5 中期（第28図・図版8-2）

中期に属すると判断された土器は19点確認されている。縄文土器全体の中では0.38%と少なく、前葉阿玉台期のものが11点、縄文土器中の比率で0.22%、後葉加曾利E期のものが8点、縄文土器中の比率で0.16%であった。

阿玉台期の出土傾向は、調査区全体からみると、散漫で集中的なまとまりはみられないが、調査区南半にやや多い傾向がみられる。1～6が該当する。1～4は口縁部片である。5、6は胴部片である。胎土には金雲母を多く混入している。

加曾利E期の出土傾向も阿玉台期と同様に調査区南半にやや多い傾向がある。7～13が該当する。すべて胴部片である。懸垂文に磨り消し縄文が充填されている。

14は棒状の破片で口縁部片とした。整理の最終段階で頸部にあたる部位が接合されたので、図版8-2で掲載することとした。15は把手状の破片である。時期不明である。16、17は底部片である。17には底面に網代痕がのこる。

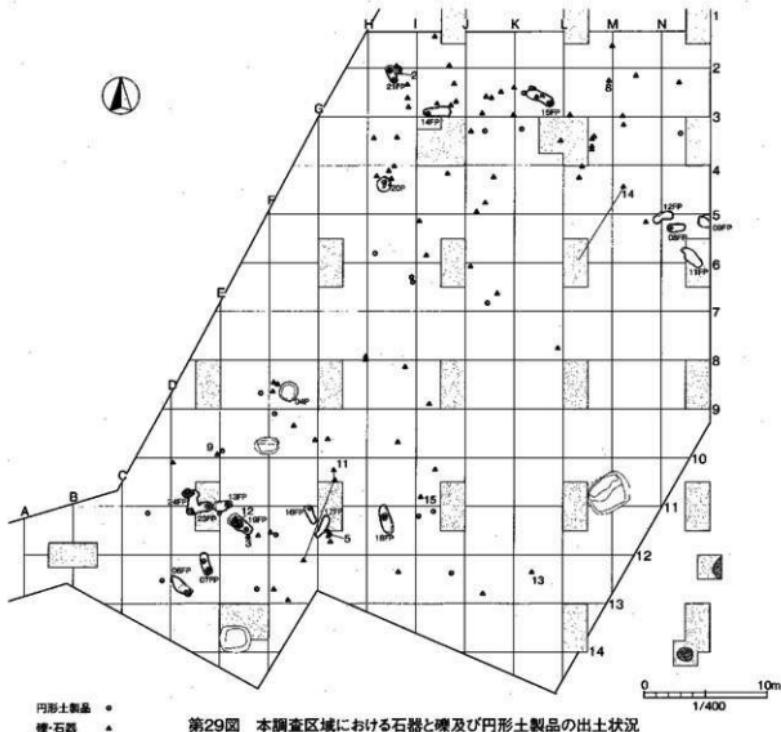


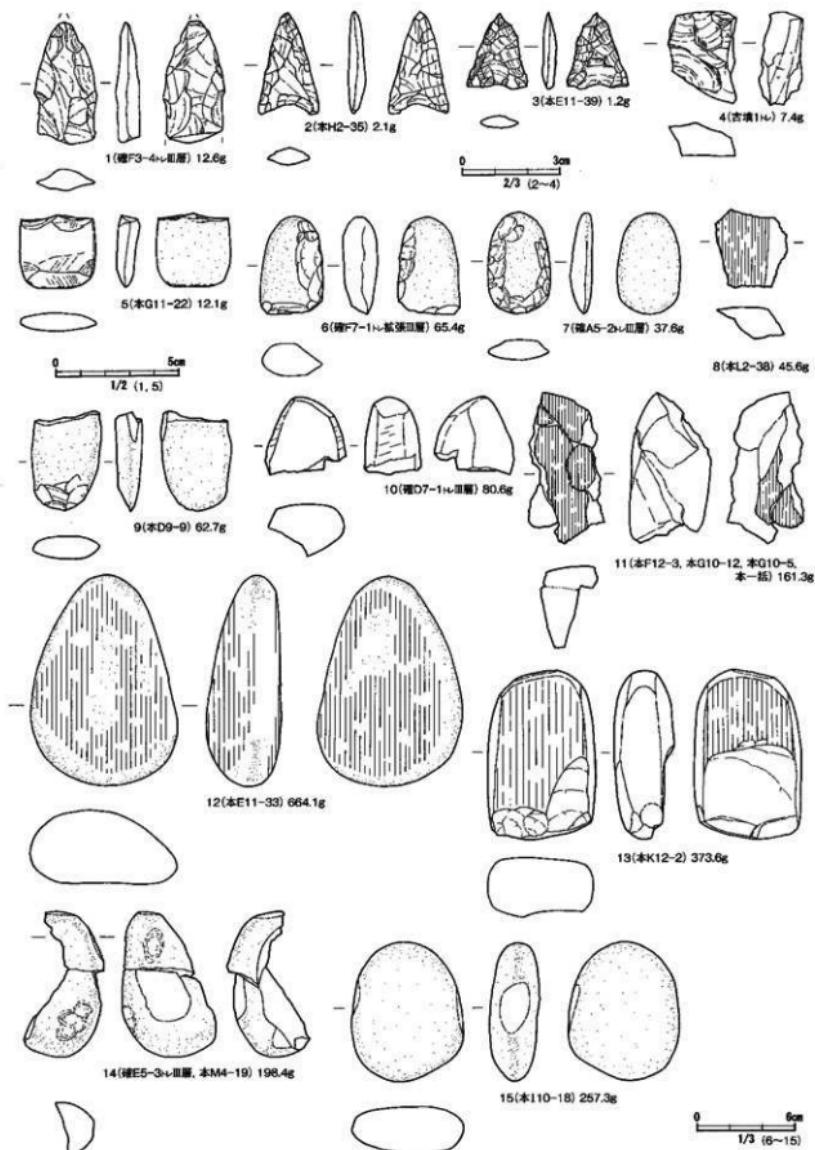
第28図 縄文土器9（中期）

## 6 石器（第29、30図・図版8-3～5）

本調査区域内で石器が7点、剥片が3点、礫が131点出土している。これらの出土傾向は、早期後葉の土器の出土傾向と同様に、本調査区域北側の炉穴群と南西側の炉穴群の周辺に多い傾向がみられる。礫は大きさに大小あるが、火熱を受けているものが多くみられた。

1は尖頭器である。先端と基部を欠損する。頁岩か。2、3は石鎌である。2は頁岩、二等辺三角形状で、基部は凹基。先端などやや欠損している。3は黒曜石、二等辺三角形状であるが、先端近くの両肩が張る。基部は凹基であるが、抉りが弱い。4は黒曜石の石核状の剥片である。5は小型の磨製石斧である。半分欠損。片面は自然面を残し、磨製で片刃とする。刃部に刃こぼれがみられる。6、7、9は小型の打製石斧である。片面は自然面を残し、打製で片刃を作る。6は片方の側面にまで打製で両刃の刃部を作り、7は両側の側面にまで片刃の刃部を作っている。9は先端部のみ刃部とし、側面は自然面のまま、基部を欠損する。8、10、11、12は磨石である。10は側面も整形している。端部に打痕もみられる。11は接合資料である。13は磨り石であるが打痕もみられる。両側面の整形から10と同様の形状をしている。端部を敲打したために生じたとみられる欠損もある。14、15は自然石に打痕がみられる。14は敲打のため破損したものであろうか。接合資料である。13～15は敲石とした。





第30図 石 器

### 第Ⅲ章 その他の時代の概要

本調査区域で検出された縄文時代以外の遺構は、土坑が4基調査されている。また、確認調査により検出され、現状保存の対象となった遺構は古墳1基、竪穴住居跡1軒、土坑2基、方形周溝状遺構1基であった。縄文時代以外の出土遺物は土師器、須恵器、その他陶磁器などであった。その他に粘土塊などの不明としたものが出土している。

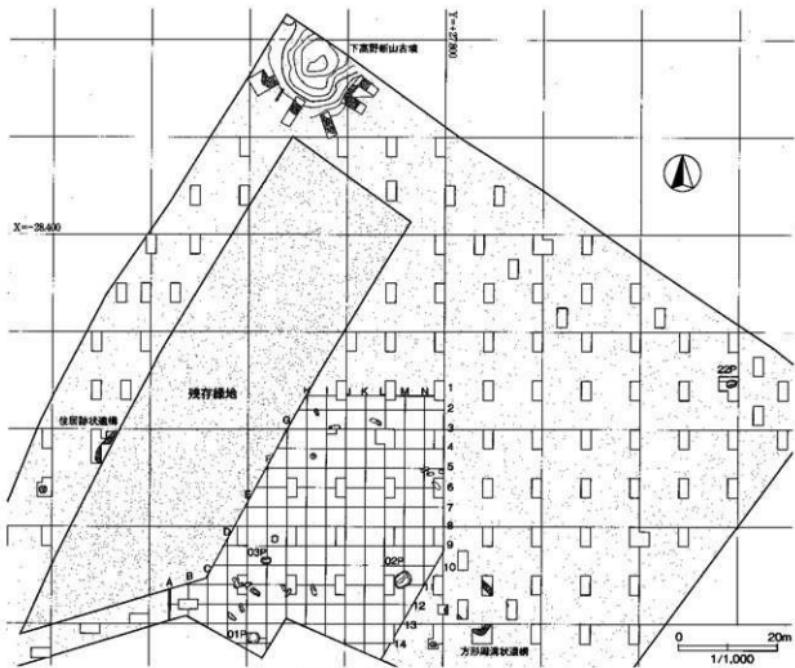
#### 第1節 古墳 (第32図・図版4-3~5)

本古墳は照会のための現地踏査ではじめて確認され、試掘や確認調査の結果、周溝が検出されたことにより、古墳と認定された。以後「下高野新山古墳」(八千代市No273)として遺跡地図に掲載されている。

古墳の立地は調査区北端に位置している。地形上の立地は高野川や森下谷津側の台地線辺から、約450m~500m台地の奥に立地する。周辺には現時点では古墳は確認されていない。

旧測地系による公共座標で、X = -28.365km, Y = +27.775kmに位置する。

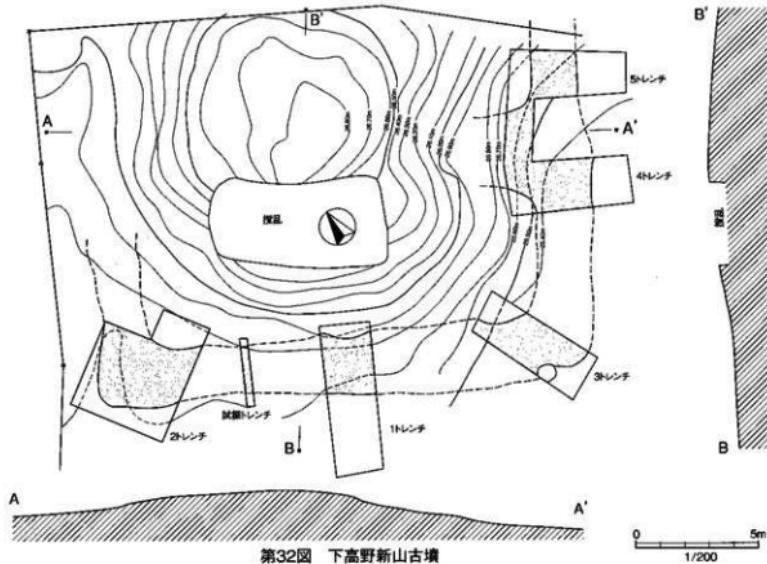
墳丘の形状は擾乱を大きく受け、また墳丘が崩れていって、明瞭な形状を遺存していないこともあり、当



第31図 その他の検出遺構

初は円墳が想定されていた。古墳の規模は調査区域外の形状が資料としてないため、確実ではないが、16mほどの範囲で墳丘が残存しており、現地表面からの高さも墳頂部の標高は不明であるが、1.4m～1.5mほどの高さがあったと推測される。

確認調査の結果、周溝は各トレンチより直線的な部分とコーナーの部分が検出された。それにより、規模が1辺約20mの方形を呈するものと判断された。また、4・5トレンチにおいて、古墳中心部に向かう周溝の一部が確認されている。周溝の幅は2mから2.5mほどあり、ローム層を約1mの深さで掘り込んでいた。周溝の断面形状は逆台形をしており、底面は1m30cmほどの幅を持っている。覆土は3層に区分され、上層が大半を占めており、黒褐色土層でローム粒子を少量混入し、しまりが良く、粘性がある。中層は薄くレンズ状に堆積していた。暗褐色土層でローム粒子を多量に混入し、しまりが良く、粘性はない。下層は底面の壁際に堆積する。暗茶褐色土層で、ローム粒子を多量に混入し、しまりが欠け、ボソボソな土層であった。確認調査のトレンチから古墳の主体部は検出されていない。

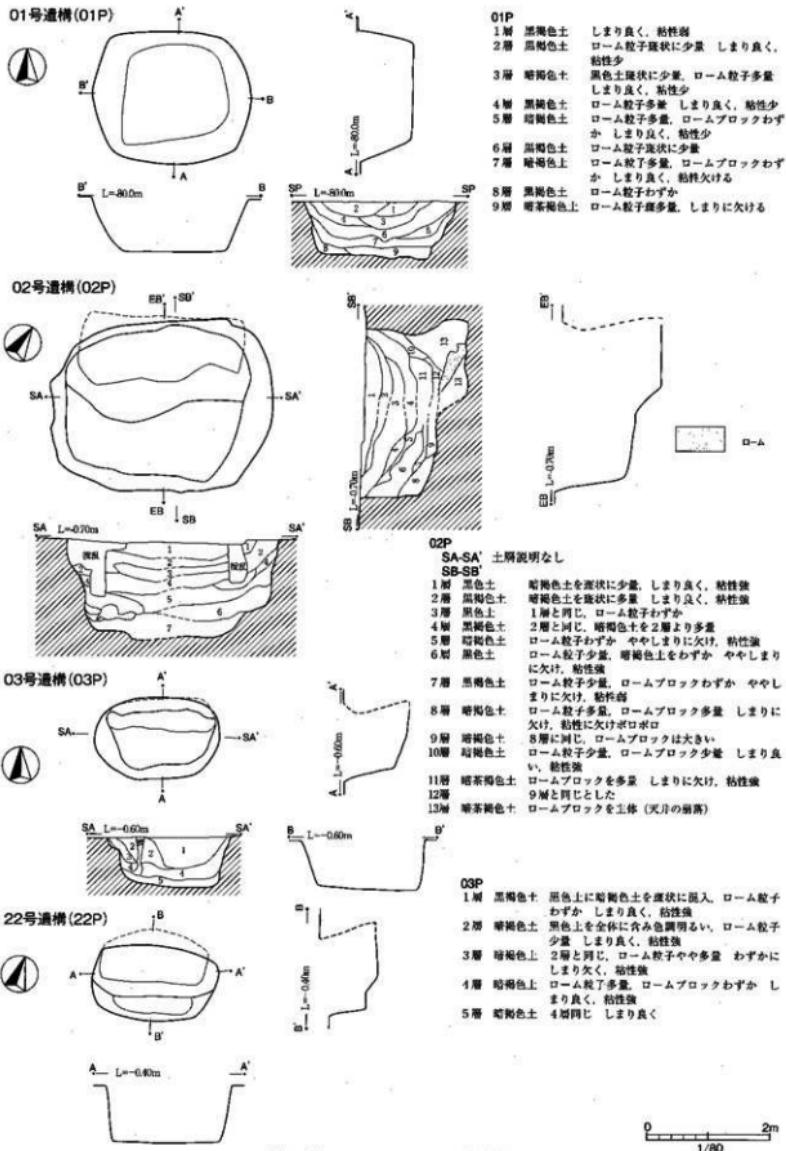


第32図 下高野新山古墳

## 第2節 土坑

縄文時代以外で本調査対象となった遺構は、1号遺構(01P)、2号遺構(02P)、3号遺構(03P)、22号遺構(22P)の4基の土坑である。1号遺構と3号遺構は本調査対象a区域内、2号遺構はb区域側、22号遺構はc区域から検出されている。

2号遺構(02P)、3号遺構(03P)、22号遺構(22P)は平面や断面での形状や土層などから地下式坑と判断された。1号遺構(01P)については地下式坑の可能性もあるが、残された資料からは明確には判断できなかった。しかし、ここでは調査時の所見に従い、いずれも地下式坑として扱う。



第33図 01・02・03・22号遺構

## 01号遺構 (01P) (第33図・図版3-6)

検出位置 本E13グリッド 規模 (長)×(短)×(深さ) 2m60cm×2m18cm×89cm  
 平面形状 脊張り方形 主軸方位 (N2° E)  
 土層 自然埋没とみられる。調査時の観察において、層中に多量のロームブロックやローム粒子を混入する土層が多く観察され、これを天井部の崩落によるものと判断し、地下式坑とした。  
 内部構造 天井部が完全に崩落してしまっているのが、急に立ち上がる壁面で、構造的には深い皿状の土坑ともいえる。  
 出土遺物 なし

## 02号遺構 (02P) (第33図・図版3-7)

検出位置 本L10・M10グリッド 規模 (長)×(短)×(深さ) 3m58cm×2m82cm×1m64cm(1m20cm)  
 平面形状 脊張り長方形 主軸方位 N35° W  
 上層 自然埋没。下層に多量のロームブロックを混入する土層が観察され、天井部の崩落と判断した。  
 内部構造 1m20cmほど掘削した段階で南東側一帯をステップ状に掘り残し、残りの北東側にさらに45cmほど掘り下げて底面を形成している。天井部は大半が崩落しているが、土層断面の形状や土層中のロームブロックから、ロームを厚く掘り残して天井としていたものとみられる。

出土遺物 一括で16点出土。繩文早期撫糸文3点、同条痕文9点、土師器3点、縁1点を出土する。

## 03号遺構 (03P) (第33図・図版4-1, 2)

検出位置 本E9・F9グリッド 規模 (長)×(短)×(深さ) 2m4cm×1m34cm×1m5cm(84cm)  
 平面形状 楕円形 主軸方位 N0.5° W 土層 東西方向の土層では自然埋没。  
 内部構造 80cmほど掘削した段階で南側一帯をわずかに傾斜させ、北側に平らな底面を形成している。  
 天井部はほとんど崩落してしまっている。  
 出土遺物 なし

## 22号遺構 (22P) (第33図・図版3-8)

検出位置 確H4-4トレンチ及び拡張区域 規模 (長)×(短)×(深さ) 2m6cm×1m24cm×94cm(60cm)  
 平面形状 楕円形 主軸方位 N18° W 土層 不明  
 内部構造 確認面より60cmほど掘削した段階で南側一帯に30cmほどの幅でステップ状に掘り残し、その北側をさらに20cmほど掘り下げて底面を広く平らに形成している。天井部はほとんど崩落てしまっているがわずかに残存する。  
 出土遺物 なし

## 第3節 その他の検出遺構

本節では確認調査により検出された遺構で、本調査対象にならず、現状保存された遺構について概要を記する。堅穴住居跡1軒、方形周溝状遺構1基、土坑2基が検出されている。

## 堅穴住居跡 (第34図・図版4-8)

検出位置 確B5-1トレンチ 規模 不明 一辺6m以上 平面形状 方形か長方形と推定  
 土層 不明 推定期限 不明 出土遺物 なし

## 方形周溝状遺構 (第34図・図版4-7)

検出位置 確F6~F7トレンチ 規模 一辺約9.5m 深さ約50cm 平面形状 方形  
 土層 自然埋没 推定期限 不明 出土遺物 なし

## 土坑（第31図）

検出位置 確A5-4トレンチ 規模 1m50cm×1m40cm 深さ不明 平面形状 円形

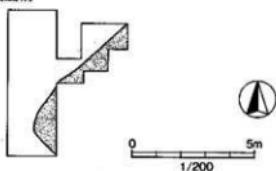
土層 不明 推定時期 不明 出土遺物 なし

## 土坑（第31図）

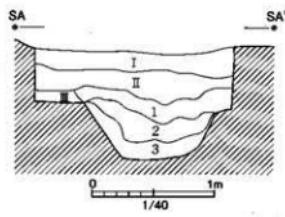
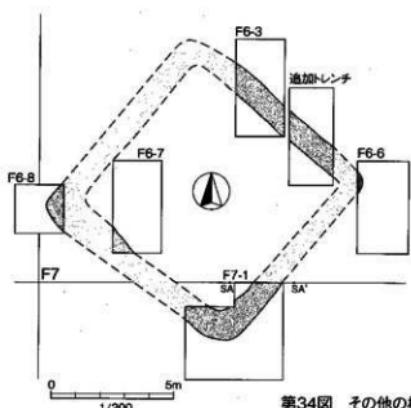
検出位置 確E7-2拡張トレンチ 規模 1m35cm×1m 深さ不明

平面形状 円形 土層 不明 時期 不明 出土遺物 なし

B5-1トレンチ検出遺構



## F6トレンチ周辺検出方形周溝状遺構



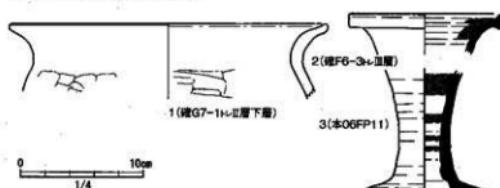
第34図 その他の検出遺構

## 第4節 繩文土器以外の出土遺物（第35図・同版8-6）

土師器が29点、須恵器が6点、陶器が2点、不明その他が12点出土している。その他の中には粘土塊などがあり、不明その他を除くと37点、全出土量の0.6%程である。

土師器は確E5-1グリッドで

13点出土しているが、他は散漫である。



第35図 その他のグリッド出土遺物

## 第IV章 まとめ

本調査で調査された遺構は縄文時代早期の炉穴17基、同時期の土坑2基、地下式坑が4基であった。また、本調査区全体の約1,300m<sup>2</sup>に対して縄文時代早期の遺物包含層の調査を実施した。その他現状保存の対象となった遺構には古墳1基、竪穴住居跡1軒、方形周溝状遺構1基、土坑2基、早期の遺物包含地区2ヶ所が検出されている。

出土遺物は調査区全体で5,160点ほど出土しているが、約96%が縄文土器で、その内約93%が早期後葉の条痕文系の土器であった。

### 縄文時代

#### 早期 前葉 橢円系土器

この時期の土器は76点が出土しており、縄文土器の中で15.3%である。出土状況はまばらでまとまりはみられない。また、この時期の遺構は確認できなかった。土器の主体は井草式とみられる。

#### 早期 中葉

沈線文土器の出土はみられないが、東北地方で出土する「明神裏Ⅲ式」系統の土器が出土している。34点出土したが、10mから15mほどの小範囲に限定されて出土している。包含層中からの出土が大半であったが、10点程は炉穴内からも出土していた。また、出土地点は離れているが、同一の土器の底部と思われる土器も出土している。この時期に相当する遺構は確認されてない。

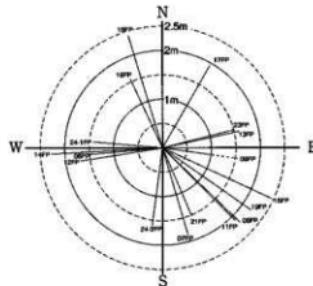
#### 早期 後葉 条痕文系土器

この時期の土器は4,785点出土している。縄文土器の中で92.75%を占めている。調査区全体では南半に多く出土する傾向がみられた。周辺の調査区（第36回）も含めてみても、南及び東側の台地縁辺に向かって遺構遺物がより濃密に展開することが予想される。包含層調査区の南北両端にも出土密度の濃い区域があり、それぞれ数ブロックにまとまっていた。本調査区の中央には遺構・遺物の希薄な区域がある。

また、当該期の遺構は4ブロック17基の炉穴と2基の土坑が検出されている。石器や礫などの出土を含め、遺物出土の濃い区域と炉穴や土坑の検出区域が重なり、その関連は濃密であった。

この時期の土器の文様の構成は、口縁下を縦線または斜線に微隆起線文で並行に区画し、区画の内外いずれかに集合沈線を充填しているものが多い。区画する微隆起線は直線的なものが多いが、曲線的に構成するものも少なからずみられる。口縁の形状は平縁のものもあるが波状口縁も目立つ。口唇部に竹管などの圧痕により刻みを付しており、そのバリエーションが多い。器形は尖底の深鉢のようであるが、平底のものもわずかにみられる。しかし、後続の崩ヶ島台式のような胴部中段にくびれを持つ土器がみられず、この時期の主体は、野島式の古段階に位置すると考えられる。

有文土器以外では、条痕文のみで整形される土器の出土量が圧倒的に多い。また、条痕文さえみられない、擦痕や無文のままのものもかなりの比率で存在している。条痕文のみの



第2表 炉穴の長軸の方位と規模

土器には波状口縁がみられたが、擦痕や無文の土器には、波状口縁はわずかしかみられなかった。

石器は量的には少ないが、石鏃と小型の磨製石斧や小型の打製石斧が出土しており、この時期の特徴を表している。円形土器も多くはないが出土する。

### 中期

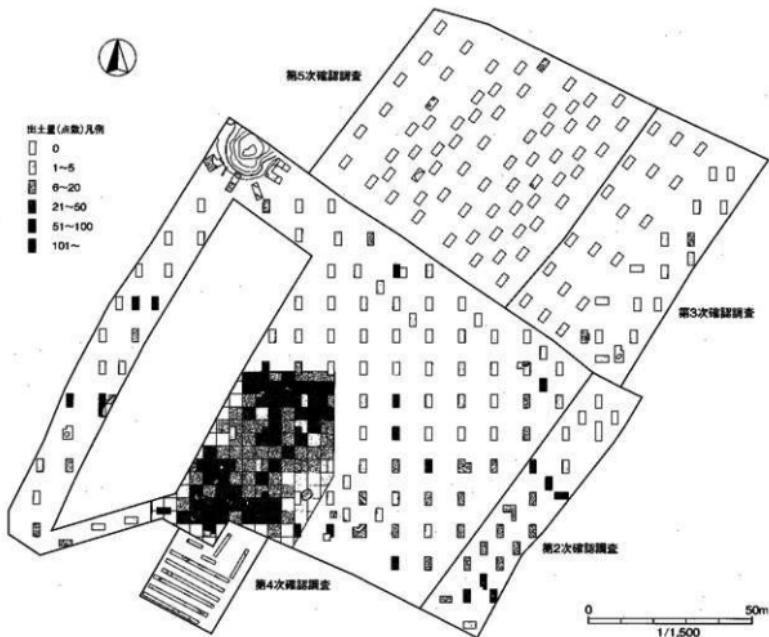
阿玉台期の土器が11点、加曾利E期が8点出土する。これらの時期に該当する遺構は検出されていない。当該期の遺跡の主体は調査区域の東側や南側に展開する可能性がある。

### その他の時代

下高野新山古墳は、確認された周溝から一辺約20mの方墳と推定され、主体部などは確認されていない。

縄文時代以外の遺構では土坑が4基検出されている。遺物からは時期を特定できなかったが、中世の地下式坑と推定される。

そのほかにも、確認調査による検出で土坑2基、一辺約10mの方形周溝状遺構1基、時期不明の竪穴住居跡1軒が検出されている。遺物では若干の土師器、須恵器、陶器が出土している。



第36図 周辺調査区域早期後葉遺物出土状況

### 下高野新山遺跡に関する参考文献

- 下高野新山古墳（地形測量） 八千代市教育委員会 1987 「千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告集」
- 第2次確認調査 八千代市教育委員会 1989 「千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告書 平成6年度」
- 第3次確認調査 八千代市教育委員会 1990 「千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告書 平成元年度」
- 第4次確認調査 八千代市教育委員会 2002 「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度」
- 第5次確認調査 八千代市教育委員会 2008 「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成19年度」
- 第2次本調査（概要） 八千代市教育委員会 1995 「平成6年度 八千代市埋蔵文化財調査年報」



1. 確認調査状況



2. 表土掘削状況



3. 遺構検出状況



4. 包含層調査状況



5. 本調査区完掘状況 (南側)



6. 本調査区完掘状況 (北側)



7. 本調査区完掘状況 (北端から南方向を撮影)



1. 06号遺構 (06FP)



2. 06号遺構 No.1出土状況



3. 07号遺構 (07FP)



4. 08号遺構 (08FP)



5. 11号遺構 (11FP)



6. 12号遺構 (12FP)



7. 13・19・23・24号遺構 (13・19・23・24FP)



8. 14号遺構 (14FP)



1. 16号遺構 (16FP)



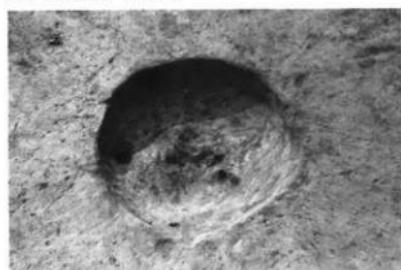
2. 18号遺構 (18FP)



3. 19号遺構 (19FP)



4. 04号遺構 (04P)



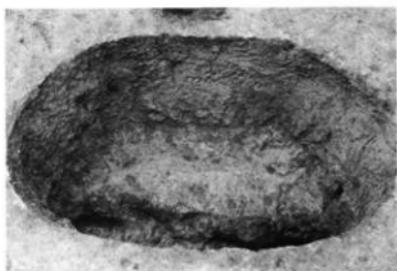
5. 20号遺構 (20P)



6. 01号遺構 (01P)



7. 02号遺構 (02P)



8. 22号遺構 (22P)



1. 03号遺構 (03P)



2. 02号遺構土層



3. 下高野新山古墳



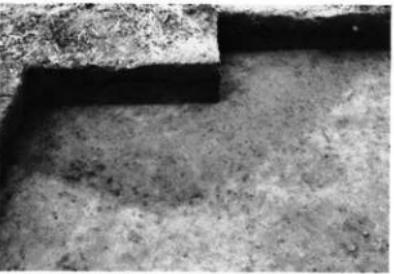
4. 下高野新山古墳周溝検出状況



5. 下高野古墳周溝



6. 本N2グリッド遺物出土状況



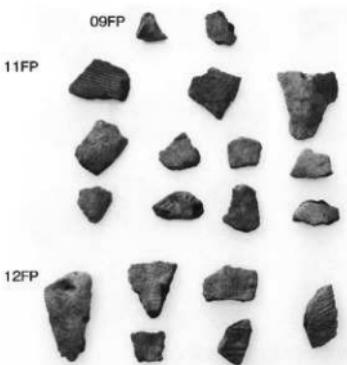
7. 確F7-1グリッド 方形周溝状遺構



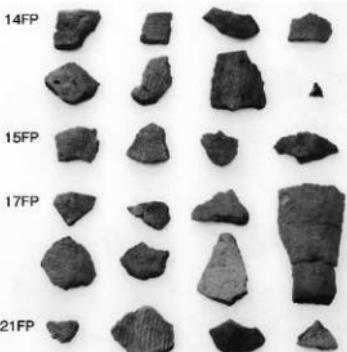
8. 確B5-1グリッド 積穴住居跡検出状況



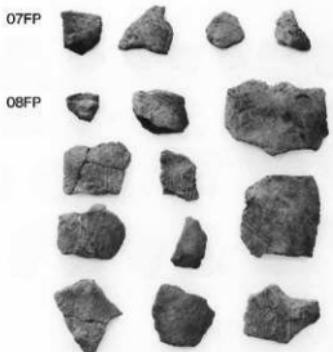
1. 06号遺構出土遺物



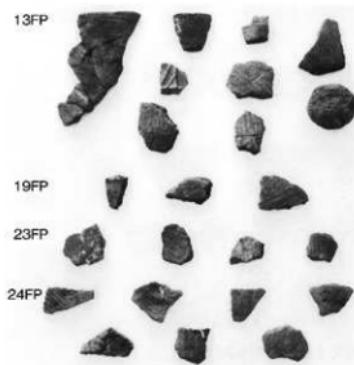
3. 09・11・12号遺構出土遺物



5. 14・15・17・21号遺構出土遺物



2. 07・08号遺構出土遺物



4. 13・19・23・24号遺構出土遺物



6. 磚



1. 繩文土器1 早期前葉



2. 繩文土器2 早期中葉



3. 繩文土器3 早期後葉1-1



4. 繩文土器3 早期後葉1-2



5. 繩文土器4 早期後葉2-1



6. 繩文土器4 早期後葉2-2



1. 繩文土器 5 早期後葉3-1



2. 繩文土器 5 早期後葉3-2



3. 繩文土器 6 早期後葉4-1



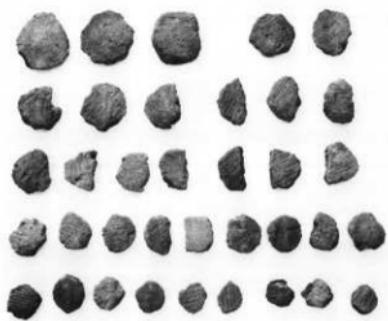
4. 繩文土器 6 早期後葉4-2



5. 繩文土器 7 早期底部-1



6. 繩文土器 7 早期底部-2



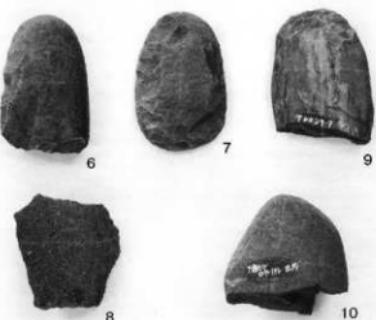
1. 繩文土器8 円形土製品



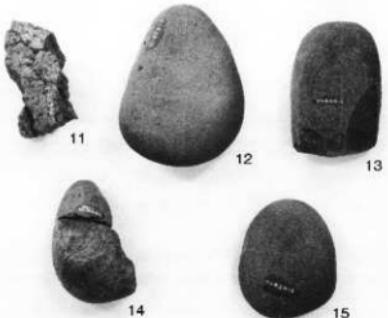
2. 繩文土器9 中期



3. 石器1



4. 石器2



5. 石器3



6. その他の遺物

## 報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし しもこうやしんやまいせき
書名	千葉県八千代市 下高野新山遺跡
附書名	埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	秋山利光
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 Tel 047-483-1151 内6114
発行年月日	西暦2009(平成21年) 6月24日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下高野新山遺跡	八千代市下高野字 新山5521ほか	12221	92	35° 44° 47°	140° 08° 16°	確認調査 19860808 ～ 19860912 本調査 19861014 ～ 世界測地系 19861117	確認調査 960m <sup>2</sup> /11,062.97m <sup>2</sup> 追加区域 64m <sup>2</sup> /604.82m <sup>2</sup> 工事面積 11,590m <sup>2</sup> 本調査区域 1,300m <sup>2</sup> 保存区域 約2,700m <sup>2</sup>	病院建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下高野新山遺跡	縄文時代 早期 遺物包含層	縄文時代 早期	記録保存区域 縄文時代 早期 炉穴 17基 土坑 前業・中業・後業包含層 中世 地下式坑 4基 現状保存区域 古墳時代 古墳 1基 堅穴住居跡 1基 方形周溝状遺構 1基 土坑 2基	縄文土器 早期(前業・中業・後業) 円形土製品 中原(阿玉台・加曾利E) 石器 尖頭器、石鏃、 磨製石斧、打製石斧 磨石等 土師器、須恵器	縄文時代早期の包含層、 炉穴集中区 中世 地下式坑群
要約			下高野新山遺跡は印旛沼の南岸、高野川(小竹川)左岸の台地上に立地する。台地縁辺からやや離れて いるが、縄文時代早期の包含層を中心に展開する遺跡である。 出土する遺物は、早期前業然糸文系土器、早期中業東北地方の明神裏口式系統の土器、早期後業条文系 土器、とりわけ窓式土器を主体とする土器は全体の93%を占めている。中期、阿玉台式土器、加曾利E式 土器を少量出土する。土師器、須恵器もわずかに出土している。 遺構は縄文時代早期条文系土器を伴う炉穴4ブロック17基や土坑2基が検出されている。 下高野新山古墳は一辺約20m四方に廻る周溝を検出したが、現状保存されている。また、中世の地下式坑が 4基検出されている。そのほか、時期は不明であるが堅穴住居跡や方形周溝状遺構なども検出されている。		

千葉県八千代市  
下高野新山遺跡  
—埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成21年6月24日発行

編 集 八千代市遺跡調査会  
八千代市教育委員会 教育総務課内  
千葉県八千代市大和田138-2

発 行 医療法人 心和会

印 刷 金子印刷企画